

平成 25 年度

高校生国際協力実体験プログラム

報 告 書

2013 年（平成 25 年）

1 回目 7 月 31 日～8 月 2 日

2 回目 8 月 19 日～8 月 21 日



独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター（JICA 九州）

<目 次>

1. は じ め に	1
2. 高校生国際協力実体験プログラム報告	
プ ロ グ ラ ム	
開会式・オリエンテーション	3
アイスブレイキング	4
ク バ ー ラ	7
JICA 研修員との交流・夕食会	9
アイスブレイク「ナマステ体操」	14
協力隊体験談	15
開発教育ワークショップ「援助する前に考えよう」	17
青年海外協力隊活動計画作り	19
青年海外協力隊活動計画発表	24
ふりかえり・閉会式	27
参加校一覧・スタッフ一覧	29
3. 添 付 資 料	
・ 高校生国際協力実体験プログラム募集要項	31
・ アンケート集計結果（参加生徒・教員）	32

1. はじめに

【事業の結果概要】

平成8年度より JICA 九州は、九州の高校生の開発途上国への理解を深めることを目的とした、「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今回で18回目を迎えた。

本年度は九州7県15校からの応募となり定員に満たなかったため、応募書類に関する選考を行い、全校を合格とした。人数は計70名（生徒55名、教員15名）が本プログラムに参加した。事前学習として、各県推進員が参加校を訪れ、JICA事業の紹介を行った。また参加する生徒達には、プログラム参加前の「国際協力」に関するイメージを※1ウェビングにより記述してもらい、プログラム後との比較を行った。

国際協力実体験プログラムの第1回目は7月31日から8月2日、第2回目は8月19日から8月21日にかけての2泊3日、JICA九州で行なわれた。JICA研修員受入事業により各国からJICA九州に来ている研修員との交流、開発途上国の料理試食、帰国隊員による体験談、開発教育ワークショップ、青年海外協力隊活動計画作り・発表等を行なった。

生徒、教員に対するアンケートの結果からは、ほぼ全員がプログラムに対して満足していることが伺えた。特に生徒達からは「活動プロジェクト作成体験」が印象に残っているという回答が多く、プロジェクト作成の過程で他県他校の生徒と一緒に活動しながら活動したことに対する感想や、「実際に行った人たちはもっと大変な思いをしながら活動しているのかと思うとすごい」というように、模擬的にはあるが途上国での活動の難しさを、まさに実体験したような声を聞くことができた。

プログラム全体を通しての参加者の評価は以下の通りである。

【アンケート結果】

・三日間を通してプログラムの内容の満足度は何%でしたか（有効回答数 51件）

満足度 (%)	50～59	60～69	70～79	80～89	90～99	100以上
人数	0人	0人	1人	2人	18人	30人

ほぼ全員が90%以上の満足度を示しており、今回のプログラム内容が充実したものであり、参加者の期待に応えられていたことが伺える。

参加者からの要望や改善点としては、毎年タイムスケジュールに関する指摘が挙げられるが、「時間が足りない」という意見と同じくらい「休憩時間が短い」という意見が挙げられるので、なかなか対応が難しい状況にある。以下、各プログラムの概要と参加者からの意見を記しているが、多くのプログラムにおいて良い感想をいただいているので、今後も反省を踏まえながらより良いプログラムを実施していきたい。

※1 「ウェビング」

一つの題材（単語）を中心として、その題材から連想できるものを書き出していき、周りに網の目のように線でつなげていく方法。グループ内での各個人の意見の共有をし、課題抽出や課題解決などの計画策定に用いられる手法。



(ウェビングの様子)

※2 「クバーラ」

アフリカのマダガスカルに伝統的にある古くからの遊びで、日本の鬼ごっこのようなゲーム。青年海外協力隊でマダガスカルに赴任していた隊員が日本に持ち帰り普及活動を進めている。道具が必要なく、ルールもシンプルではあるが、仲間とのコミュニケーションがとても重要になる。グループ内でのアイスブレイクとして、一昨年度より一プログラムとして取り入れている。



(クバーラの様子)

2. 高校生国際協力実体験プログラム報告

【プログラム名】

開会式・オリエンテーション

担当：古 賀（福岡市国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ プログラムの開会をもって参加への意識を高める。
- ・ プログラムの目的および意義を確認することで、より質の高いプログラムを目指す。
- ・ プログラム関係者の存在を認識する。

(2) 概 要

はじめに「JICA 九州高校生国際協力実体験プログラム 2013」開会にあたり、JICA 九州国際センター所長の勝田幸秀より開会の挨拶を行った。私たちの生活と世界はつながっており国際協力は私たちの身近なものであること、また JICA が実施している国際協力事業について説明を行い、この研修で多くの人と出会い、交流し、様々なことを学んで欲しいと参加者への期待を述べた。

開会挨拶後、本プログラム参加にあたっての心構えとして、その意義と目的について意識をもたせるためのブリーフィングを行った。

その後、3 日間を共に過ごすスタッフ（1 回目：九州各県の国際協力推進員、（特活）九州海外協力協会職員、JICA 九州にて企業研修中である高校教諭、2 回目は1 回目のスタッフに JICA 九州のインターンも含む）の自己紹介を行った。

最後に、（特活）九州海外協力協会職員より、3 日間を九州国際センターで過ごすにあたっての注意事項、諸連絡を行った。

(3) 課題とその対応策

1 回目のスタッフ自己紹介では、スタッフのニックネーム、青年海外協力隊での派遣国、活動内容、任地で印象に残った事を紹介したため、一人1分という時間をオーバーした。また、学校紹介の時間も移動の時間、紹介の時間が予想以上にかかり、次のプログラムに影響を及ぼした。

このことを改善するため、2 回目ではスタッフ自己紹介は、ニックネームと青年海外協力隊での派遣国、職種に限定した。また、学校紹介については、高校生の緊張を解きほぐす効果的な時間とするために、アイスブレイクの時間に移した。

この対策により、予定時間内に開会式とオリエンテーションを終了することができた。



（開会式 JICA 九州所長 勝田の挨拶）



（スタッフ自己紹介）

【プログラム名】

アイスブレイキング

担当：崎 田（宮崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ① 参加者一人ひとりの緊張をほぐす。
- ② コミュニケーション（話す・聴く）の練習をする。
- ③ グループメンバーとの交流を深める。

(2) 概 要

全体ワーク、ペアワーク、グループワークとして、5種類のワークを実施した。

全体ワークでは、バースデーチェーン（参加者が誕生日順に円になる）を実施し、円を形成した後にニックネームと誕生日を発表するという形で、簡単な自己紹介とした。全体にどのような参加者がいるのか、顔と名前の一致を図る機会として位置づけた。1回目、2回目ともに滞りなく円が形成された。

ペアワークでは、ペアを形成した後、オセロ紹介（ペアで互いの長所と短所を発表しあう）を実施した。相手が長所を話す際は、大きくうなずく、笑顔で返すなど、積極的な「聴く」姿勢をとり、相手が短所を話す際は、その短所を裏返して長所にして返すという「相手のネガティブな発言を受け止める」姿勢をとるように指示をした。実施に先立って、スタッフで例を示した。男女ペアでは恥ずかしそうなそぶりを見せるペアもあり、また相手の短所を裏返すというのは困難なものであったが、乗り越えることで自信につながるワークであったため、励ましながら進行的した。終了後に、言葉だけに頼らず、「相手の目を見て、笑顔で接し、時にジェスチャーも交える」ことで相手は安心し、コミュニケーションが円滑になることを補足し、続くプログラム「JICA 研修員（外国人）との交流」でも実践するよう伝えた。

グループワークでは、まずグループを形成した後に、「エブリボディアップ（座った状態で手をつなぎ、同時に立ち上がる）」を合図として、机とイスのセッティングをする共同作業をした。制限時間を設け、ゲーム感覚で作業を進めた結果、5分程度でセッティングを完了した。



(バースデーチェーン)



(ペアでのオセロ紹介)

続くグループワークでは、世界の挨拶カードを世界地図に貼りつけていくワークを実施した。「国名」と「挨拶（こんにちは）」の言語が書かれた31枚のカードを準備し、世界地図にある国名を探しながら、指定の場所に置いて行くという作業を行った。世界には様々な人々が住んでおりそれぞれが異なる言葉や文字を持っているということ、3000語の少数言語が存在することなどを再確認し、日本にも大切に守らなければならない少数言語（宮古語、八重山語、アイヌ語など）があることを伝えた。グループ内で順番にカードを回しながら「国名」と「挨拶（こんにちは）」を声に出し、グループの仲間が挨拶に答えるというルールを決めた。その後、「国」や「挨拶」について気づいたことをグループ内で話合ってもらった。

挨拶の例として、大内田推進員（鹿児島）が派遣されていたホンジュラスの挨拶、西宮推進員（北九州）が派遣されていたガーナの挨拶をペアで実践。1回目は九州海外協力協会の田中職員が派遣されていたザンビアの挨拶を全員に実践してもらった。

恥ずかしそうにしている様子もあったが、初対面の相手と違う言葉で挨拶しあうことで、グループワークが進むたびに緊張がほぐれて行く様子がみられた。

最後のグループワークでは、グループ名を決め、グループごとに発表した。グループメンバーの共通点、相違点からヒントを得て、できるだけユニークなグループ名をつくるように指示した。グループによって進度に差があったが、1回目、2回目ともに、全グループが制限時間内でグループ名を決定することができた。

(3) 課題とその対応策

- ・ ペアワークでは、グループワークに向けてジェンダーバランスを整えるため男女ペアの設定で行った。1回目のペアワークでは長所と短所を聞くという内容だったので、初対面では答えにくい人や照れがある等、抵抗がある生徒も見受けられた。そのため、2回目では自己紹介の項目をこちらで提示し、お互いを紹介しあうように変更した。1回目に比べると会話が進み、よりスムーズな展開となった。
- ・ ネームシールが剥がれやすいという問題があったため、2回目ではピン付きネームカードを準備し、見えやすい部分に付けてもらうように変更した。



(エブリボディアップ)



(世界の挨拶マップ)

- ・ 開会式でおこなっていた学校紹介では、移動時間等も含め時間が押してしまったため、2回目ではアイスブレイク内に入れ、バックスペースに移動した時点で各校1分以内の学校紹介を行った。床に座りリラックスした状態での学校紹介だったので、よい雰囲気を実施することができた。

(4) 参加者からの声

- ・ コミュニケーションは大切なものだと感じた。
- ・ 緊張を解きほぐすことができた。アイスブレイキングがなければ友達をつくることができなかった。
- ・ スタッフのユーモアある進行でとてもリラックスできた。

【プログラム名】

クバーラ

担当：第1回：渡 辺（大分県国際協力推進員）

第2回：松 尾（佐賀県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 協力隊の活動（クバーラの普及啓発活動）を知る。
- ・ プログラム内での最初のグループ活動となるため、アイスブレイクの一つとして緊張をほぐし、3日間共に過ごす仲間を知る機会とする。
- ・ マダガスカル隊員の体験談をメインプログラムの活動計画づくりに活かしてもらう。

(2) 概 要

～1回目～

まずは、クバーラと現地の協力隊活動を知ってもらうために協力隊（マダガスカル・青少年活動）が関わったクバーラのミニドキュメンタリーを全員で視聴。現地の子供達やクバーラの様子を見てもらった。その後、九州海外協力協会の佃職員進行のもとクバーラを体験。

ルール説明後、実際にクバーラを体験し、作戦タイムを設けたのち、実践として試合を行った。クバーラ体験の後、実際にマダガスカルで青年海外協力隊として活動した元隊員の佃職員による体験を高校生に向けて行った。



（ドキュメンタリー視聴）



（クバーラ実践）



（作戦会議の様子）



（佃職員による体験談）

～ 2 回目～

1 回目と同じ進行形態で実施。前回の反省から、DVD 視聴と練習を短くし、試合の時間をしっかりとった。はじめに総当たり戦で試合を行ったが、時間が余ったため、次にトーナメント戦を行った。順位が決まるためか、総当たり戦と比べ、より白熱した試合が目立った。はじめは、ルールを理解するのに精一杯であったが、試合を重ねるにつれ、各グループで作戦を練り、試合に臨んでいた。男子生徒だけが目立つことなく、女子生徒もしっかりと活躍していた。

(3) 課題とその対応策

- ・ 1 回目のアンケートに、試合の時間が短かったとの意見が複数あったことから、2 回目は、DVD 視聴と練習の時間を短くし、試合時間を長くした。
- ・ 試合のやり方（総当たり戦やトーナメント戦）で参加者の盛り上がりが違うので、その場の状況に応じて、試合のやり方を工夫する。

(4) 参加者からの声

- ・ クバーラでは、マダガスカルがどういう国なのか、ということや、クバーラの成り立ちまで知ることができ、とてもためになりました。クバーラの実体験では、攻撃と守備に分かれてやりました。全 10 試合中 8 試合しかプレーできなかったのは残念でしたが、とても面白かったです。できなかった分も含めて、学校などでやってみたいと思います。
- ・ はじめて体験したのですが、ルールも簡単でとても楽しかったです。同じグループの友達やまた違う学校の生徒とも仲良くなれました。
- ・ ゲームの説明が分かりやすくとてもとっつきやすく楽しめました。また、マダガスカルについても知ることができ一石二鳥でした。あと少し遊びたかったです。
- ・ 私はスポーツが苦手なので、どんなスポーツだろうと不安でした。でもルールは分かりやすかったし、きつすぎるわけでもなく、とても楽しかったです。今日、初めて会った人とあんなに一生懸命作戦を考えることができたことに驚いています。クバーラを通して、たくさんの友達ができました。
- ・ チームで作戦などを考えたりして、仲良くなれた気がします。頭をつかいながら楽しく活動することができました。
- ・ 私はクバーラを初め聞いた時、道具などを使って踊ったりする遊びかと想像していました。でも実際は、鬼ごっこみたいで、本気でやれる遊びでした。クバーラの映像でできた子供たちの姿を見ると、私達が部活の試合で勝ちたい!!!と言う時と同じことを言っていて、その時にどんなに国が遠くても、スポーツに対する“勝ちたい”という感情は一緒なんだと思いました。
- ・ 自分のグループともう一つ他のグループとチームを組んで行ったので、とても楽しかった。アイスブレイキングではあまり会話することはなかったが、作戦タイム等で会話をするのができ、仲良く交流することができてよかった。

【プログラム名】

JICA 研修員との交流

担当：大 野（熊本県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 研修員との交流を通して、異文化理解を深める。
- ・ 十分に言葉が通じない相手との交流を通して、コミュニケーション能力を高める。
- ・ 相手を理解しようとすることの大切さやその意義に気づき、日常生活へも通じることに気付いてもらう。

(2) 概 要

JICA 九州の技術研修員（以下研修員）が高校生の各グループに1～2名入り、言語や文化の違う外国人とコミュニケーションを図る交流プログラムを行った。

まず、研修員全員が前でネームボードを使って母国語で自己紹介を行い、裏面の国旗を紹介。同じ国旗がある高校生チームのテーブルに着席（5分）。その後、各テーブルで自己紹介（高校生は英語、研修員は名前と専門を日本語で）を行なった（5分）。

自己紹介終了後は、テーブルに置いてある母国の写真や九州地図、質問に詰まった時用の“Question BOX”などを活用して会話を進めた。お互いの国・文化の紹介を通して“異なること”や“同じこと”を見つける呼びかけをし、交流を促した（交流30分）。話した



（研修員の自己紹介）



（研修員との交流 1）



（研修員との交流 2）



（インタビュー内容の発表）

内容を B2 ポスター裏に書いて（描いたり貼ったりを含む）、高校生に発表してもらった（2 分×7 チーム）。

（3）課題とその対応策

- ・ 1 回目は、英語があまり理解できていない研修員がいるとの情報が研修課からあったが、前プログラムまでの担当スタッフからグループの様子を共有してもらい、元気の良いチームとその研修員を組ませることで、他チームと同様の交流を促すことができた。
- ・ 1 回目は、通訳の打合せが不十分で、どちらの言うことを聞くのか不明確な場面があったため、2 回目は役割を徹底し改善した。
- ・ 2 回目の参加者は、高校生も研修員も 1 回目と比較するとややおとなしかったが、時間の経過と共に徐々に交流が深まっていったので信じて待つ時間も必要だと感じた。
- ・ グループ発表の時間を入れると、交流自体の時間がやや短く感じられるが、プログラム全体の時間の都合上、仕方ないかと考える。
- ・ 研修員との打合せは、前日のブリーフィングと当日開始前確認の 2 回を予定していたが、1 回目の研修員はちょうど研修内容が（消防の）実技演習であったため当日の確認打合わせの時間が取れなかった。2 回目は前日が日曜日にあたり、ブリーフィングが当日開始前となった。研修員の都合上やむを得ぬ面ではあるが、実体験プログラムの開始日はなるべく月曜を避けた方がよい。

（4）参加者からの声

- ・ ケニアの方が話される英語が ALT の先生が話すのとはまた違っていて、英語 1 つでも話す人が違うだけで聞き取りやすさが違うのだなと感じました。会話はあともう少しでわかるのに…という場面が結構あり、歯がゆい思いをしたので、これを機にもっと英会話力を身に付けたいです。
- ・ 日本とは違う環境の国々の方と交流して、自分の知らなかったことをたくさん知ることができた。
- ・ 今回の交流で英語を話すことができて、英語が好きになった。
- ・ 普段は接することのないような国の方々がたくさんおられ、みなさんとても良い人ばかりで時間がたつのがあっという間でした。

（5）そ の 他

- ・ 参加研修員出身国≪1 回目≫
（技術研修員 8 名） フィジー 2 名、パラオ 1 名、ミャンマー 1 名、ニウエ 1 名、ケニア 1 名、アルメニア 1 名、ウルグアイ 1 名
- ・ 参加研修員出身国≪2 回目≫
（技術研修員 7 名） アルジェリア 1 名、中華人民共和国 2 名、インドネシア 1 名、セルビア 1 名、コソボ 1 名、トルコ 1 名

【プログラム名】

交流夕食会

担当：大 野（熊本県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 研修員の国の料理を通し、交流をさらに深める。
- ・ 研修員と世界各国の料理を味わうことによって、食文化の違いや習慣を理解する。（ラマダン、ハラル / ベジタリアンの紹介も含む。）

(2) 概 要

研修員との交流プログラムに続き、研修員を交えた夕食交流会を行なった。

食事はバイキング形式。メニューは研修員の国のポピュラーな料理とした。研修員より料理の紹介をしてもらうと共に（1回目は割愛）、各テーブルに簡単な説明入りのメニュー表を配布、両壁にも掲示した。ハラルマークやベジタリアンについても説明した。両壁には説明と資料を掲示した。

2回目は料理の説明を研修員から直接聞いたこともあり、参加者の反応が良く、研修員も喜んでいて。料理は、参加者にも研修員にもおいしかったと好評であった。

最後に、交流会と交流夕食会について、研修員から一言ずつコメントをもらった(15分)。

メニューについては以下の通り

～1回目～

お国らしさと生徒達の口に合うものを考慮し選定。（消防の研修の方々なので満腹感も）
アルメニア料理「ボズバシュ」：

ラム肉煮込みのスープ的なもの

ミャンマー料理「チェッターヒン / オンタミン」：

レモングラス入りカレーをココナッツミルクご飯にかける物

ウルグアイ料理「カルネ アサド」（西語）：

牛ステーキ

ケニア料理「ギゼリ」：

豆の煮込み、「クスクス」は好みでトマト煮ソースを好みでかける。

（中東由来だがシャレた料理として定着とのこと）

パラオ料理「コロッケ」：

日系人も多い国柄、ジャガイモがタロイモになった料理。

今回は代用品の里芋にて

フィジー料理「カリ・トア」：

ロティと食べるチキンのカレー

ニウエについては、JICA 九州で提供できるオリジナル料理が無かった為、大洋州の料理は似ているので了解してもらった。また、食べ方の違いを楽しんでもらう主旨でカレーを2種類提供している。



(1 回目の食事)



(2 回目の食事)



(ビュッフェ形式の配膳)



(交流しながらの食事)

～ 2 回目～

セルビア料理「グラシュ」:

肉と野菜のシチュー

コソボ料理「フリージャ」V:

小麦粉に塩を入れた生地を焼き、サワークリームを載せる。

これを何層か重ねたパンケーキ

インドネシア料理「ナシゴレン」H:

鶏肉と魚介類のピリ辛チャーハン

中国料理「エビチリソース」H:

エビに衣を付けて揚げ、チリソースであえたもの

アルジェリア料理「野菜と豆のクスクス」V:

粒状のセモリナ粉を蒸したクスクス。

野菜と豆など、いろいろなものをかけて食べる

トルコ料理「メネメン」V:

野菜とトマトを炒めて煮詰めたものに、溶き卵・チーズを加えた料理

※ V: ベジタリアン H: ハラル

(3) 課題とその対応策

- ・ 料理については、1 回目は完食の料理が出た半面、サンドイッチやサラダが多く残った。2 回目は、全体量を少なくした。1 回目に比べご飯ものが少なかったことと、男子高校生が多かったので、少し量が足りなかった。
- ・ 1 回目は、残飯入れなどが来ておらず料理のセッティングが遅れた。呼びかけても食事を取りに行く参加者がなかなか出なかったことと、バイキングの並びが1列で最初の飲み物の所で行列になり、開始に時間がかかった（飲み物をバイキングの列に加えたのは、ウーロン茶の数がテーブル数と合わずテーブルに配れなかったため）。対応として、研修員からの料理の紹介を割愛して時間調整をした。また、皿が小さく何度も取りに行かねばならなかった。2 回目は、食堂の担当者に口頭と文書（FAX）で上記残飯入れや皿、飲み物の数の確認をお願いした。また、食事の配置を2列にし、飲み物はテーブルに配したので、時間通りに進行し、研修員からの料理の紹介もできた。
- ・ 今年は、「研修員との交流」での話題を料理に絞らず、食に関する話題を「交流夕食会」でもらうために研修員に料理の紹介をしてもらった。しかし、他のスタッフとの情報共有が時間的に難しかったり、研修員との打合せにも時間が必要なので次回以降は検討の必要がある。

(4) 参加者からの声

- ・ 海外の料理もすごくおいしかったです。
- ・ NIUE の国風や国旗、食文化等を知れてよかったです。
- ・ もう少し夕食会の時間を長くして、海外の方々の話しをもっと聞けるようにすればいいと思う。
- ・ 中国の方と一緒に食事をしたことで、中国への印象が変わった。
- ・ 食事中に英語が飛び交う場も初めてで本当に楽しかった。

【プログラム名】

アイスブレイク「ナマステ体操」

担当：崎 田（宮崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 2日目のアイスブレイクの目的も取り入れ、全員で参加できる活動とした。
- ・ 「ネパール」の JICA 専門家が開発した「ナマステ体操」を紹介することで、世界の中の一つの国として「ネパール」や JICA の活動に興味関心を持ってもらえるように工夫した。

(2) 概 要

ネパールには国民体操の位置づけで JICA が開発した「ナマステ体操」があることを説明。約 100 校以上の学校の朝礼で導入され、国営 TV も毎週定時に放送しており、日本のラジオ体操のようなものであることを紹介した。

「体操のお兄さんと呼んでみよう！」という呼び掛けで、九州海外協力協会の米村職員が前に立ち、DVD 映像を上映しながら「ナマステ体操」を実施した。初めはスローテンポだが、後半踊りのような激しいテンポに変わっていくことから、汗だくになりながら参加生徒はもちろん先生方も積極的に体操に取り組んでいた。

(3) 課題とその対応策

- ・ 時間配分は特に問題なかったが、体操終了後に息が上がっている生徒がいたため、終了後は休憩をしっかりと取りつつ参加者の感想をその場で聞くようにしてもよい。

(4) 参加者からの声

- ・ ラジオ体操のようなものは日本にしかないと思っていましたが、他の国にも似たような体操があってびっくりしました。
- ・ ものすごく激しくて面白かったです。
- ・ ラジオ体操よりきつくてびっくりした。
- ・ ポーズも難しくて真似をするのが大変だった。
- ・ ちょっと恥ずかしかったけれど、気持ちよく体操できた。



(ナマステ体操その 1)



(ナマステ体操その 2)

【プログラム名】

協力隊体験談

担当：渡 辺（大分県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 青年海外協力隊として実際に現地で活動してきた経験者の話を聞くことで、国際協力の現場を知る。
- ・ 様々な生き方に触れ、自分自身を見つめなおし、将来の進路選択に役立てる。

(2) 概 要

青年海外協力隊事業の概要説明と、実際に現地で活動した経験者の体験談を行った。講師は、保健医療と人的資源の分野で各回2名、計4名。講師の詳細は以下の通り。

- 1回目： 梅田宏美さん（西アフリカ・ベナン、栄養士）、
大淵絵斗さん（ウガンダ・アフリカ、青少年活動）
2回目： 北園さつ紀さん（東アフリカ・タンザニア、エイズ対策）、
吉嶋哲也さん（東南アジア・インドネシア、体育・バレーボール）

内容は、派遣国の概要（場所、気候、言語、宗教、主要産業）、参加へのきっかけ（高校生の頃に思っていたことなど）、活動内容、活動で苦勞したところ、嬉しかったこと、生活や活動で心がけていたこと、あなたにとっての『国際協力とは…』という流れで、パワーポイントを使用し、講義受講形式で行った。また、青年海外協力隊の職種一覧（進路選択資料）、発表の項目ごとのワークシート（記録用）を作成し、生徒に配布した。

(3) 課題とその対応策

- ・ 体験談の終わりに質問時間を設けたが、生徒からなかなか挙がらなかった。プログラムが終了してから、個別に講師に質問する生徒が見受けられた。今後は、漠然とした問いかけではなく、グループごとに質問事項をまとめ、感想と共に発表させるグループワークを取り入れたい。
- ・ 1回目は、会場のコンピュータの不具合により、開始時間が遅れた。2日目は、映像デー



（1 回目 大淵さんの発表）



（2 回目 北園さんの発表）

タが正しく動作しなかった。どちらも事前に動作確認を行ったが、生じたので、予備のコンピュータを準備する必要がある。

(4) 参加者からの声

- ・ 良い面だけでなく、悪い面や問題も知ることができたので、国際協力をより身近に感じました。
- ・ 私も青年海外協力隊になって、自分にできる何かを探したいなと思いました。
- ・ 目の前で子供が亡くなるのにだんだん慣れて、病院に来た時点でその子の生死がわかるという話が1番心に残りました。
- ・ 自分も実際に見に行ってみたいと思った。現地の状況を自分の目で見たいです。

【プログラム名】

開発教育ワークショップ「援助する前に考えよう」

担当：木 村（長崎県国際協力推進員）

(1) ね ら い

- ・ 「援助とは何か」「国際協力とは何をするとか、また何をしてはいけないか」について考える。モノやお金を贈る援助の問題点、現地の人びとに与える影響について考える。
- ・ ワークショップの設定をメインプログラムの舞台と共通にすることで、国・村の概要を把握させ、メインへの導入とする。また、「よりよい援助とはなにか？」をグループで話し合いにより、次の「開発プロジェクト作成」の際の一助とする。

(2) 概 要

導入から、「寄付と援助」に関する3つの設問について話し合うグループワークを行った。

導入としてグループ旅行の日程の説明からウエストティモール国バリボ村の地理的なイメージを膨らませた。

1つめのワークでは、村の学校へ10ドルの寄付を募るアイコ・ナカムラという人物からのメッセージに対し、各人がそれぞれどんな理由で何ドル寄付するかを考えた。各グループで取りまとめた合計の寄付額と、理由を全体に発表した。進行役はホワイトボードに各グループの寄付の金額を書き出した。

2つめのワークでは、村、小学校、アイコについて書かれた情報シートをグループで読み合わせ、そこからポストイットに各自、アイコの活動についての賛成意見、反対意見を書いて、出た意見について各グループで話し合った。最終的にグループごとにアイコの活動について賛成か反対か、その理由としてどのような意見が出たか発表した。

3つ目のワークでは、どうすればアイコの活動がよりよいものになるか、各自のアイデア、アイコへのアドバイスをグループで話し合った。

3つのワークの中で、生徒たちから、アイコさんの活動が村のニーズに沿ったものではないのではないか、もっと必要とされている援助があるのではないか、村の人たちに協力してもらった方がいいのではないか、欠点はあってもアイコさんの気持ちや行動力は評価すべき、など、様々な意見が出た。また、村や学校の年間予算と自分たちの寄付した金額



(改善点などについて発表)



(寄付について考える)

を比較することで、日本から見ればわずかに思える額の寄付金でも現地社会には大きな影響を与えることになることへの気づきが見られた。

最後にまとめとして、モノやお金を贈る援助には気をつけなければいけない点があること、援助の仕方によっては現地の人間関係や環境、経済、文化へ影響を与えることになること、村の人たちの意見を聞き、現地のニーズを把握すること、自助努力を促すことの大切さを確認した。

(3) 課題とその対応策

～1回目～

- ・ ポスターに書きこむ時間がかかってしまった。

⇒ **対応策**： 2回目からは、時間短縮のため、ワーク1～3全てにポストイットを使用した。付箋の利用はメインプログラムでも使われる手法なので、ワークショップで練習することは望ましい。

～2回目～

- ・ 進行役の全体説明でワークの意図や指示がしっかり伝わっておらず、また高校生がポストイットを使用したワークに慣れていないため手が動き出すまでに時間がかかった。そのため、各推進員が各グループを回り、説明してフォローした。

⇒ **対応策**： 付箋に書いて意見を整理するというやり方について、説明をもっと丁寧にする。作業手順などの説明の時に、生徒の注意を引く工夫をする。

～2回目～

- ・ 進行について、生徒のワークの進捗具合に合わせ時間延長したため、時間が押した。

⇒ **対応策**： 作業や時間をもっと細かく区切り進行し、生徒の理解力や集中力を高める。

～1回目、2回目共通～

- ・ このワークショップの元の設問が難しいため、生徒の導き方が難しい。

⇒ **対応策**： 来年度もこのワークショップを行う場合、2つ目のワークは「賛成」「反対」ではなく「良い点」「悪い点」を見つけるワークにする。3つ目のワークは2つ目のワークで見つけた「悪い点」を改善するワークにする、など、ワークの趣旨を生かし流れをスムーズにするための改良の必要があると思われる。

(4) 参加者からの声

- ・ それぞれの班員の意見や考えを聞きながら考えることができました。
- ・ 劇では、自分が青年海外協力隊になったと考えてデモンストレーションができすごく楽しかったです。
- ・ 自分が正しいと思った意見も、違う視点から見ると十分な意見ではなく、他の人の意見も自分と正反対だったりしてとてもいい機会だった。
- ・ どのようにしたらもっとよくなるか考えると、たくさん改善する点が出てきたので、何事もよく考えるともっと上手いくのかなと思った。

【プログラム名】

青年海外協力隊活動計画作り

担当：大内田（鹿児島県国際協力推進員）

西 宮（北九州市国際協力推進員）

（1）ね ら い

参加者が青年海外協力隊員として開発途上国に派遣されると想定して、現地の課題にいかに取り組んでいくかを、2年間の活動計画に落とし込みながら、協力隊の疑似体験をすることにより、国際協力活動を行う上での難しさや熟慮すべき点について気付いてもらう。

（2）概 要

■ メインプログラム導入（担当：大内田推進員）

「世界と自分とのつながり」について、エビや携帯電話のレアメタルを例に挙げながら、知らず知らずのうちに、私たちの生活は世界と直結しており、児童労働や資源をめぐる争いなどの問題に関与している可能性もあることに触れ、協力隊の活動計画作りにおいても、自分たちに関係のないことではなく、同じ地球に住む仲間として取り組んでももらいたいと伝えた。

また、活動計画作りの条件として、①チーム名、②活動名（プロジェクトタイトル）、③ターゲット、④村の現状、⑤活動内容、⑥目指す将来の村のイメージの6点を活動計画に盛り込むこと、翌日の活動計画発表の要領、評価項目の4点（妥当性、計画性、効果、持続性）についての説明を行った。

さらに、今回は全員が『コミュニティ開発』という職種で派遣されると設定し、実際にコミュニティ開発隊員として派遣されていた、田中職員（九州海外協力協会）、岡田職員（JICA 九州）、西宮推進員（北九州市）より、同じ職種でも、収入向上や衛生・感染症予防、教育、女性の地位向上、環境教育など、さまざまな活動が出来ることを説明した。

■ 活動計画作りの導入（担当：西宮推進員）

「青年海外協力隊要望調査票」を各自に配布。午前中に実施した、「援助する前に考えよう」のワークショップの舞台と同じウエストティモール国バリボ村に、コミュニティ開発の職種で派遣されることを演出。今度は観光ではなく、ボランティアとして派遣されることになったと伝える。

さらに、スライド写真を見せながら、バリボ村に派遣される過程を体感してもらい、関係者分析へと流れ、村にどんな人物が住んでいるかを想像してもらう。村長、学校の先生、校長先生、子ども、農民、商人、医師、看護師など、出てきた順に、会場中央部に設営した村のセットにそれぞれ入ってもらい、役者が揃ったところで、その村で起こる出来事をスタッフと生徒の参加型寸劇で再現した。

～寸劇の内容～

- ① メッカに向かってお祈り（イスラム教）
- ② 水汲みをする女の子（ジェンダー・水問題）
- ③ 市場での出来事（ゴミ問題・児童労働）
- ④ 診療所での出来事（医療事情・識字率）
- ⑤ 病院での出来事（栄養失調）
- ⑥ 役場の休憩時間（隊員登場、ゴミ問題）

※それぞれの寸劇には村の特徴や問題点を織り交ぜた。

■ 活動計画の叩き台作り（担当：西宮推進員）

寸劇後は、協力隊の最初の観察期間ということで、グループでウエストティモール国およびバリボ村の概要の読み込みをしてもらい、活動計画作りための情報整理を、ある程度こちらで支援するべく、ふせんとポスターの裏紙を使用しながら、①村の課題・良い所の書き出し→②全体での情報共有→③課題を4つ選択→④ダイヤモンドランキング→⑤活用出来そうな良い所のピックアップ→⑥ターゲット・活動方針の仮決めを行った。



（あなたの生活の中は世界とつながっていますか？）



（村の問題を少しずつ整理してみよう。）



（臨場感溢れる演技で、一気にバリボ村を再現）



（新隊員はがっちり握手で村に迎えられました。）

■ 活動計画作成（グループワーク）（担当：大内田推進員、西宮推進員、他全スタッフ）

ある程度、グループ内で活動の方向性を決めた後は、村人役のスタッフ（ファシリテーター）と自由にコミュニケーションを取りながら、活動内容を固めていく作業にそれぞれ入った。

計画作りの途中で、ウエストティモール国に実際に派遣されていた隊員と村人のインタビュー映像を入手したという設定で約 15 分のビデオを上映。隊員を暖かく見守ってくれている村人もいれば、「自分達の収入には関係ない」という無関心な意見などもあり、また、隊員 OV の声として、「自分がいなくなったあとも、活動が続けられるように気を付けた」などのコメントを聞きながら、自分達の計画を見つめ直すきっかけ作りを行った。

さらに、村人役のスタッフ（ファシリテーター）が、協力隊 OV として再登場し、隊員連絡所でお互いの悩みを相談し合うような雰囲気を作り、車座になって、生徒たちが自由にスタッフと交流出来る時間を作り、さらにリアルな意見交換を行った。

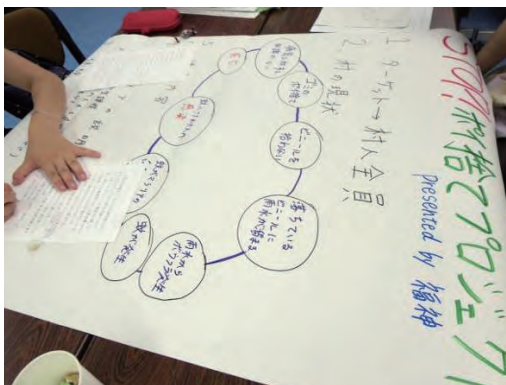
グループワーク中は、メインプログラム担当の 2 人と、村人役ファシリテーターが常に情報共有を行いながら、計画作りが進んでいないグループ、隊員の活動をうまくイメージできていないグループ、また、あまりに現実離れした活動になりそうなグループの把握に努め、そういったグループに対して「誰と活動するのか」「本当に村人に受け入れられる草の根レベルの活動なのか」「村人の意見は聞いたのか」といった助言を



（村人に実情を聞くと、思わぬ答えが…。）



（粘り強く村の人たちの声を聞き出していきます。）



（各グループ工夫を凝らして、発表資料を作成）



（翌日の発表に向けてラストサポート）

しながら、それぞれの役割から活動計画作りを支援した。

(3) 課題とその対応策

～1回目～

- ・ 関係者分析の際に、なかなか村の登場人物が出てこなかった。
⇒ **対応策**：会場全面を使って村のセットを広く作ったため、声を拾えていなかったという指摘もあり、2回目は、周りのスタッフも協力して声掛け、声拾いを行い、また村のセットも出来るだけ中央に寄せてセッティングした。
- ・ 村人役とメインプログラム担当2人の情報共有がうまく出来なかった。
⇒ **対応策**：村人役ファシリテーター用メモを作成し、生徒とのやり取りを記録に取り、また村人会議を開いて情報共有、および疑問解決に役立てた。またこのメモを、JICA 関係者の評価シートのみにある項目「態度」の部分に反映出来るように工夫した。

～2回目～

- ・ 前年度のメインプログラムでは、職種を選ぶ段階で時間がかかっていたので、今回は「コミュニティ開発」と設定したが、高専・工業・商業高校の生徒が多い場合は、職種を選ばせた方が良いかもしれない。
⇒ **対応策**：参加者が決定してからでないと分からないが、来年度はこのあたりも検討してみてはどうか。活動計画作りの時だけは、同じ学校のメンバーでやってみるのも面白いかもしれない。
- ・ 時間をかければ良いものが出来るとは限らないので、初期の段階で、ダイヤモンドランキングを使うなどして、活動の方向性を一緒に整理していったが、この部分の思考を「作業化」することで、深く考える時間が失われてしまっていないか。
⇒ **対応策**：時間が限られているため、思考のポイントを提示することは、今後とも必要であるとする。ただ活動計画の方向性を決めるためのファシリテーション方法は再考の余地あり。
- ・ 簡単にあきらめてしまう生徒がいた。
⇒ **対応策**：チーム編成の際に、気になる生徒を同じチームに入れないこと。また高校生は学年にも配慮すべき。粘り強い対応も必要だが、全ての人に伝わるわけではないことも事実として受け止める。また、どうしても気になる生徒がいれば、事前に先生に対応のアドバイスを頂くことも検討してみてはどうか。

(4) 参加者からの声

- ・ 自分が実際に行ったつもりになって、いろいろ考えてみたらすごく難しくて、自分がただ単に思い付いた事をすればいい訳ではないのだなと実感した。
- ・ インタビューのVTRを見たり、村人さんに色々お話を聞いたりしていて、私たちが考えていたことと村の人達が考えている事は実際には違うということが分かった。

- ・ バリボ村の課題があまりにも多すぎて、取り組むものを決めるのにもとても迷ったし、課題を決めても「本当に村の人達はこの課題について困っているのだろうか」「そもそもこの課題を解決するにはもっとこの村の根本的なもの（村の文化や宗教）から変えなければならないのでは??」と、考えれば考えるほど深みにはまっていく感じだった。しかし、最後はとても良いプロジェクトが出来た。
- ・ 村の人達が私たちの開発計画についてたくさん質問をしてきて、頭の中が混乱しそうだった。なかなか計画が上手くいかず、正直最初はこんなに難しいとは思っていなかった。でも実際に協力隊に行ってきた方々のことを考えると、このくらいできついか言っていたら、国際協力は出来ないと思った。もっと色々なところで自分を高めていきたい。
- ・ 村の人に質問をすることで、自分の中の考えの甘さや、自分の考えが全然具体的でなく、現実性もなかったなと反省した。
- ・ 様々な問題が山積みで、その中でも限られた時間、お金でプロジェクトを立てるのはとても難しかった。今までの中で一番、国際協力について考える事が出来たと思う。
- ・ 色々な人の話を聞けば聞くほど分からなくなり、奥が深く、問題に問題が重なり、解決方法の一つもないように思ってしまった。しかし、少しずつ無理がないように、時間をかけてでもいいので、行動し、やってみることが大切だと思った。
- ・ グループの仲間と協力しながら、村をどうやって変えていくかを話し合う時、助け合いの良さ、協調性の大切さを改めて考えた。
- ・ これをやろうと決めても、たくさんの壁に当たりまくるし、最初は自分達から行動を起こすことからしか始まらないし、どのように伝えればみんなが興味を持つのかと考え出すとすごく大変だった。でも、活動計画を仕上げた時、とても達成感があった。

【プログラム名】

青年海外協力隊活動計画 発表

担当：大内田（鹿児島県国際協力推進員）

西 宮（北九州市国際協力推進員）

(1) ね ら い

前日の「青年海外協力隊活動計画作り」でグループ毎に作成した『活動計画』を発表し、皆で共有しながら、質疑応答を通して国際協力の理想と現実についての理解を深める。

(2) 概 要

活動計画発表前に、①発表時間は1グループ4分以内、②全員が話す、③模造紙に書いてあることだけを読むのではなく、なぜその活動に決定したかなどの経緯も含めて発表する、④プレゼンテーションの対象者は村人、というルールの確認を行った。

発表を聞く参加者及び JICA スタッフは、4つの評価項目（妥当性・計画性・効果・持続性）のポイントが書かれたシートに従って5段階評価をし、コメントを記入。また、前日の活動計画作りから携わっている JICA スタッフは、4項目の他に『態度』についても評価し、それらをもとに質疑応答を行なった。

発表者は、言葉が通じない、識字率が低いかもしれない村人を想定し、ビニールゴミなど実物を提示しながら説明したり、分かりやすいように絵を描いていたり、村人に理解してもらうための様々な工夫を取り入れながら、活動計画を発表した。また計画内容も、水質改善、保健衛生、環境教育、観光促進など着眼点も様々であった。

今回お金は使えないという設定で活動計画を作ってもらったのだが、機材や施設の建設が必要となりそうな計画もあり、質疑応答のなかで鋭い質問を受けるグループも少なくなかった。発表者は、戸惑いの表情を見せながらも補足説明や、それに至った経緯を説明することで、自分たちで作った計画についてより具体的なイメージが掴めていたようだ。

発表が終わると、評価シートに基づいて参加者、スタッフ及び JICA 関係者による投票を行い、獲得票数が一番多かった計画を作ったグループに優秀賞、スタッフ及び JICA 関係者からの票を一番多く集めた計画を作ったグループに JICA 賞が贈られた。

その後、1回目は JICA 九州の田中課長、2回目は桑江職員より講評をいただき、それ



(1 回目 優秀賞グループ)



(1 回目 JICA 賞グループ)

それぞれの活動について、似たような活動を実際に行っている国際協力事業の紹介や、もし現実にはそれらの活動に取り組んだ場合に想定される課題などを解説していただいた。

最後に、1回目は大内田推進員、2回目は西宮推進員が、このウエストティモール国バリボ村は実際にはない架空の村であるということを参加者に話した上で、似たような国は世界中にあり同じような問題を抱えていること、私たちスタッフも青年海外協力隊としてそういった国で活動し、参加者が活動計画作りを通して悩んだり、課題にぶつかったりしたのと同じように、時には挫折しそうになりながら、現地の人と共に課題解決のため悪戦苦闘してきたことを伝えた。更には、様々な問題が紛争へ発展し、今もなお尊い命が人の手によって奪われている国もあるという現実に触れ、今回のプロジェクト作成を通して考えたこと、悩んだこと、感じたことが高校生のみなさんの日常、更にはこれからの人生の中で活かされ、国際協力についても自分なりの考えを持てるようになってもらえればという思いを伝え締めくくった。

(3) 課題とその対応策

～1回目～

- ・ 生徒からの質問が出てこなかったため、先生方の発表の際に村人とのやり取りを、デモンストレーションとして行うと良いかもしれない。
- ⇒ **対応策**：2回目実施時、事前に先生方へ趣旨を説明した上でご協力頂き、先生方の発表の際に活発な質疑応答を行った。
- ⇒ **結果**：この対応策にて生徒からの発言を増やすことは出来なかったため、今後、対応策を再考する必要がある。

～2回目～

- ・ 質疑応答時、スタッフによる質疑が多かったためか、生徒からの意見や質問が殆ど出なかった。
- ⇒ **対応策**：質疑応答の時間を少し増やしてでも、生徒が考えて発言する時間をとる。もしくは、各班から1回は意見や質問をするように決めるなど、発表について検討する。



(2回目 優秀賞グループ)



(2回目 JICA 賞グループ)

- ・ 1回目、2回目とも同じように JICA 関係者へ向け、「発表・投票」への参加依頼案内をしたが、2回目実施時は参加が少なかった。

⇒ **対応策**： 発表開始時間を、JICA 九州の始業時間の 9 時半からに合わせることを検討してみてはどうか。ただ、拘束時間がどうしても長くなってしまうため、他業務との兼ね合いで参加者を増やすことは難しいのかもしれない。

(4) 参加者からの声

- ・ 他の人のプロジェクトを聞いて、自分の考えをひろげ、深めることができた。
- ・ 自分たちの活動の問題点を指摘され、発見することがたくさんあった。
- ・ 意見の出し合いも、まとめることも、発表することも自己主張と協力があつたからだと実感できた。
- ・ 発表をして、村人からの厳しい質問に答えられず大変だったが、自分が実際にその国に行ったような充実感を感じることができた。

【プログラム名】

ふりかえり・閉会式

担当：古賀（福岡市国際協力推進員）

(1) ねらい

- ・ 3日間で参加したプログラムを思い起こすことにより、何を行い、何を知り、何を感じ、何を学んだのかを認識する。
- ・ プログラムの参加前後での自分の変化を認識する。
- ・ 青年海外協力隊の活動を通じての国際協力のみではなく、世界が抱えている問題とその現実を知り、その深刻さや協力の必要性を改めて認識させるとともに、今、自分に何ができるかについて考える。

(2) 概要

・ ふりかえり

学校毎にふりかえりを行った。東ティモールで生まれた歌「星降る島（邦題）」をバックミュージックにパワーポイントで作成した3日間の活動写真と共にプログラムを振り返った。東ティモールについての歴史、独立までの出来事を話し、東ティモールの問題に日本も無関係ではなかったことを伝えた。

その後、事前学習で実施した際と同じ形で国際協力のウェビング（「国際協力」をキーワードとして作成する派生図）を行い、3日間のプログラムを通して、学んだ国際協力、感じたこと、気が付いたことなどを記入した。その後、事前学習で作成したウェビングと見比べ、プログラム参加前と参加後でどのような変化があったか、学校毎に話しあった後、発表を行い、「“国際協力”に対して、JICA や青年海外協力隊、ユニセフ等の言葉しか出てきていなかったが、より具体的に書くことができた」などの感想があった。

全学校の発表後、世界の現状をより知ってもらい、参加者自身の考えを深めてもらうことを目的として「NINJA&SOLDIER（NPO 法人里山を考える会から借用）」を上映した。

「“違い”とはどういうことか」「“違い”を感じる、“私はあの人と違う人間”と感ずることによってどのような問題が起きるか」という問題提起を行い、締めくくった。

最後に参加者はこの3日間のプログラムを終えた現在の気持ちや、学んだこと、感じたことを、“自分への手紙”として書き記した。ポストカードは後日、各県担当の国際協力推進員より届けることとした。

・ 閉会式

プログラムの終了にあたり、JICA 九州国際センター次長の笛吹よりあいさつを行った。

今回参加者の皆さんに作成してもらった青年海外協力隊の活動計画は、海外での問題だけではなく、自分の地域でも応用できることがある。今回の経験をぜひ今後活か

して欲しいとの言葉で締めくくった。その後アンケート回収、諸連絡を済ませ、参加者全員による記念撮影を行い閉会とした。

(3) 課題とその対応策

1回目では、終了時間をオーバーした。また、参加者からの意見や感想をより引き出すため、こちらからの問題提起に関してはなるべく簡潔にし、参加者が意見交換を行い、より自身の考えを深めることができる時間を提供する必要があった。2回目はこの点において改善を行い、終了時間を少々オーバーしたものの、参加者が自分自身を見つめ直すことのできる時間を十分に確保することができた。



(閉会式 JICA 九州次長 菅吹の挨拶)



(3 日間のふりかえりの時間)

高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

<第1回目：7月31日（水）～8月2日（金） 計36名>

	県	学校名	生徒	教員
1	福岡	私立沖学園高等学校	3	1
2	佐賀	私立早稲田佐賀高等学校	2	1
3	熊本	県立熊本北高等学校	3	1
4	熊本	県立多良木高等学校	4	1
5	宮崎	県立日向高等学校	4	1
6	宮崎	県立高鍋高等学校	4	1
7	鹿児島	私立鹿児島純心女子高等学校	4	1
8	鹿児島	私立鳳凰高等学校	4	1
小 計			28 名	8 名

<第2回目：8月19日（月）～8月21日（水） 計34名>

	県	学校名	生徒	教員
1	福岡	県立小倉西高等学校	3	1
2	佐賀	県立武雄高等学校	4	1
3	長崎	県立佐世保商業高等学校	4	1
4	大分	国立大分工業高等専門学校	4	1
5	鹿児島	県立加治木工業高等学校	4	1
6	鹿児島	県立錦江湾高等学校	4	1
7	鹿児島	県立屋久島高等学校	4	1
小 計			27 名	7 名

プログラム実施スタッフ一覧

	所属	名前	任国	職種
1	福岡市国際協力推進員	古 賀 知 美	中央アジア・キルギス	青 少 年 活 動
2	北九州市国際協力推進員	西 宮 奈緒美	西アフリカ・ガーナ	コミュニティ開発
3	大分県国際協力推進員	渡 辺 了 孔	東アジア・モンゴル	視 聴 覚 教 育
4	佐賀県国際協力推進員	松 尾 典 子	西アフリカ・ベナン	栄 養 士
5	長崎県国際協力推進員	木 村 暁 代	東南アジア・フィリピン	青 少 年 活 動
6	宮崎県国際協力推進員	崎 田 佳予子	東南アジア・インドネシア	栄 養 士
7	熊本県国際協力推進員	大 野 章 子	中央アメリカ・コスタリカ	美 術
8	鹿児島県国際協力推進員	大内田 祥 子	中央アメリカ・ホンジュラス	栄 養 士
9	(特活)九州海外協力協会	米 村 淳 平	大洋州・ミクロネシア連邦	小 学 校 教 育
10	(特活)九州海外協力協会	田 中 雅 史	南部アフリカ・ザンビア	コミュニティ開発

3. 添 付 資 料

高校生国際協力実体験プログラム募集要項

2013年度 第1回目 JICA 国際協力実体験プログラムアンケート

1日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあまあ満足している	不満がある
アイスブレイキング	20人	7人	1人	
クバーラ	18人	6人	4人	
JICA 研修員との交流	26人	2人		
交流夕食会	24人	4人		

●自分の満足度が高かったプログラムについてのご意見、ご感想、予想外だったことなど記入ください。

[JICA 研修員との交流・夕食会]

- ・ ケニアの方が話される英語が ALT の先生が話すのとはまた違っていて、英語1つでも話す人が違うだけで聞き取りやすさが違うのだなと感じました。会話はあともう少しでわかるのに…という場面が結構あり、歯がゆい思いをしたので、これを機にもっと英会話力を身に付けたいです。
- ・ 最後に「もう僕たちは家族だ」と言ってもらえたのは、本当に嬉しく、愛情の深さを感じました。
- ・ 完璧な英語で会話できない自分が恥ずかしいと思っていましたが、今日の体験で、筆記を使ったり、単語で伝えたりして、積極的に自分の考え、気持ちを伝えることができるようになったと思います。
- ・ 普段は接することのないような国の方々がたくさんおられ、みなさんとても良い人ばかりで時間がたつのがあっという間でした。
- ・ いつかケニアに行く機会があったらなと思い、日本のことも伝えていけたらいいなと思いました。
- ・ 互いにコミュニケーションがとれるようになると、相手の方の言葉をもっと知りたいと思うようになりました。
- ・ またこのような機会があれば参加したいです。
- ・ 海外の料理もすごくおいしかったです。
- ・ NIUE の国風や国旗、食文化等を知れてよかったです。
- ・ もう少し夕食会の時間を長くして、海外の方々の話しをもっと聞けるようにすればいいと思う。

[クバーラ]

- ・ 初めてするスポーツだったのでとても楽しかった。

- ・ 実際にやってみると予想以上に楽しかったので、またやってみたいと思った。
- ・ 同じグループの友達や、違う学校の生徒とも仲良くなれました。
- ・ クバーラをする子供たちの映像を見てみると、どんなに国は違っても、スポーツに対する“勝ちたい!!”という感情は一緒だと思いました。
- ・ もっと世界中の遊びをしてみたいです。
- ・ いろいろ工夫したかったけど、短くてできませんでした。

●本日のプログラムの中で、気づいた点や期待はずれだったことがあれば記入してください。

- ・ クバーラをもっとしたかった。事前学習のときにルールなどを説明していれば、当日スムーズにできるのではと思った。
- ・ アイスブレイキングは普通のゲームかと思っていましたが、仲良くするための遊びと知り驚きました。
- ・ クバーラでは、マダガスカルがどんな国なのかということや、クバーラの成り立ちまで知ることができ、とてもためになりました。
- ・ JICA のスタッフの方も、面白い方や話しかけやすい方ばかりで、研修がより一層楽しいです。
- ・ グループだけでなく、色々な JICA 研修員の方と交流したかったなと思いました。
- ・ もっと早く部屋に入れるようにしてほしい。
- ・ 1日目だったこともあり、いつもより思いきった行動や積極性、に欠けてしまったなあと反省しています。

2 日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあまあ満足している	不満がある
ナマステ体操	18 人	6 人	2 人	
協力隊体験談	22 人	3 人		
国際理解ワークショップ	19 人	6 人		
青年海外協力隊・活動計画作り	18 人	5 人	2 人	

●自分の満足度が高かったプログラムについてのご意見、ご感想、予想外だったことなど記入ください。

[ナマステ体操]

- ・ ラジオ体操のようなものは日本にしかないと思っていましたが、他の国にも似たような体操があっけびっくりしました。
- ・ ものすごく激しくて面白かったです。

[協力隊体験談]

- ・ 良い面だけでなく、悪い面や問題も知ることができたので、国際協力をより身近に感じました。
- ・ 一生懸命になれるっていいなと思いました。
- ・ 海外のことについてもっと知りたくなりました。
- ・ 発展途上国の厳しい事情を理解できて良かった。
- ・ 現地での自分の無力さを感じたお話を聴いて、本当に海外で私にだったら何ができるんだろうと考えさせられました。
- ・ 私も海外協力隊になって、自分にできる何かを探したいなと思いました。
- ・ 目の前で子供が亡くなるのにだんだん慣れて、病院に来た時点でその子の生死がわかるという話が1番心に残りました。
- ・ コウモリ風呂は衝撃的でした。
- ・ マラリアの感染は蚊によるものだと、感染の可能性の低い日本に住む私たちが知っているのに、現地の人は知らないということがなんだか不思議でした。
- ・ 世界の貧しい国では命を救うことができるとは限られていないんだと思い、聴いていてなんだか悲しくなりました。

[ワークショップ「援助する前に考えよう」]

- ・ それぞれの班員の意見や考えを聞きながら考えることができました。

[青年海外協力協会・活動計画作り]

- ・ 劇では、自分が青年海外協力隊になったと考えてデモンストレーションを行えてすごく楽しかったです。
- ・ 今まで青年海外協力隊がどんなことをしているのかほとんど知らなかったのが、驚きがたくさんありました。
- ・ ただ自分が思いついたことをすれば良いわけではないのだと実感しました。
- ・ グループでの活動計画を立てることは本当に難しすぎて、自分が1つ考え付くと新たな課題が生まれるし、次々と問題が出てきてきりが無く大変でした。青年海外協力隊の方々は実際に活動できていてすごいなと思いました。
- ・ 私なんかにはできるのかなあと不安でしたが、考え方や見方を変えてみるだけでたくさんの考え方が見えました。
- ・ 4人で同じものを作っていくことで話も一人でするより広がってよかったです。

●本日のプログラムの中で、気づいた点や期待はずれだったことがあれば記入してください。

- ・ ナマステ体操がすごくハードでした。
- ・ ナマステ体操面白かったです。最初は簡単なのにだんだん激しくなっていき、びっくりしました。
- ・ ナマステ体操はもっと広いところであれば楽しめると思う。

- ・ 発表の作成時間が短くて大変だった。
- ・ 特に協力体験談が良かったと思う。
- ・ 今回のプロジェクトを通して、学んだ事をもっともっと深めて、たくさんの人に教えて、現状を知ってもらいたいなと思いました。
- ・ 話を聞いたり、DVD で現地の状況を知ってやっぱり人間関係が大変なんだということがよくわかった。それなのに海外で現地の人々と絆を深められてとてもすごいなと思いました。

●質 問

- ・ 青年海外協力隊に行く決めて親や友人に反対されませんでしたか？
- ・ 気分転換はどうやっていたのですか？
- ・ カルテは何語で書かれていたのですか？（梅田さんへ）

3 日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあまあ満足している	不満がある
活動計画発表	20 人	6 人		

3 日間を通して、このプログラム全体の満足度は_____パーセント（％）

満足度	200%	150%	120%	100%	90%	80%
	1 人	1 人	2 人	13 人	8 人	2 人

●満足度の理由

- ・ 知らない人と知らない国と一緒に学べたから（200％）。
- ・ 初めてたくさんの国の人に会って、言葉を超えたコミュニケーションを学んだから（150％）。
- ・ 自分の中で何かが変わったと思ったから（100％）。
- ・ 初めて出会った人たちと仲良くなれたし、協力しながら発表できたから（100％）
- ・ すべてが充実していて、とても楽しく満足できたから（100％）
- ・ 体験、活動することが初めてのことであった。色々な事を吸収できた。（100％）
- ・ 国際協力について知ることができ、自分自身を見直す良いきっかけになった（100％）
- ・ もっと色々なことが知りたいと思えた（90％）
- ・ 活動計画発表の製作時間が短くてかなりあわててしまったから（90％）。
- ・ 自分なりに考え発言することができたが、周りに任せすぎてしまった（90％）
- ・ 質問に対して上手く受け答えできなかった（80％）

●一番印象に残ったプログラムは何ですか。その理由を記入してください。

[交流・夕食会]

- ・ 色々な国の料理が食べることができて良かった。
- ・ 言葉はわからなかったけどお互いに伝え合うことができた。
- ・ 英語が上手く伝わったことがよかった。
- ・ 交流も楽しかったし、協力隊の方とお話できたこともいい経験になった。
- ・ 外国の方とお話しをする機会があまり無かったので、今回お話しできてよかった。

[協力隊体験談]

- ・ 実際に行った人の話を聞き、自分も行ってみたいと考えることができた
- ・ 自分も行ってみたいという気持ちが強くなった。
- ・ 嫌なこと、うれしかったことを聞く事ができてよかった

[国際理解ワークショップ「援助する前に考えよう」]

- ・ ボランティアにもいろいろあって、計画的に活動しないと戦争等の原因をつくってしまうと感じた。
- ・ 一人ひとりが色んな考えを持っていて、すごく刺激になった。
- ・ 協力隊の方が行うステップを知らない人と意見を共有するという活動は他ではできないから。

[活動計画発表]

- ・ 4人全員で作れたことが嬉しかった。
- ・ 他の人のプロジェクトを聞いて、自分の考えをひろげ、深めることができた。
- ・ 自分たちの活動の問題点を指摘され、発見することがたくさんあった。
- ・ みんなで協力し合ったり、自分なりに調べて意見を発表したりすることで積極性が身についた。
- ・ みんなが考えた計画はとても良かった。実現する将来がくるといい。

[映 画]

- ・ 「違い」という言葉に考えさせられた。
- ・ アニメーションから今まで考えたことも無いことを考え、現状を変えてほしいと思った。

●プログラム全体を通しての感想

- ・ 今までこんなに多くの外国の方とお話する機会が無かったので、とても良い経験になった。
- ・ 考えることがたくさんあって、自分が聞いたり、見たりすることがすべてじゃないと思った。

- ・ 初めは不安だったが、本当に楽しかった。
- ・ 世界と自分とのつながりや、コミュニケーションのとり方を学ぶことができてよかった。
- ・ 開発途上国の現状や青年海外協力隊のことを知れて勉強になった。
- ・ 普段の生活では経験できないようなことばかりでよかった。
- ・ 同世代の子と交流できて、いい勉強になった。
- ・ このプログラムを通して、世界の広さを改めて感じることができました。
- ・ いつか、世界で働き、活躍している多くの日本人の仲間入りをしたい。
- ・ 新たな出会いもあったし、心の変化もあった。このプログラムに参加してよかった
- ・ 国際協力とは何か、理解できた
- ・ もっといろんな国の言語が話せるようになった。
- ・ とにかく楽しくて、新しいことだらけだった。
- ・ 今まで知らなかった自分の一面をしれてうれしかった。

●このプログラムを通して学んだことを、これからどのように活かそうと思いますか。学校で取り組みたいこと・やってみたい事などありますか。

- ・ 国際協力という言葉の意味を教えていこうと思った。
- ・ 自分たちに何ができるのか、しっかりと考えていきたい。
- ・ いま、困っている国があることを忘れないでいたい。また、それを伝えていきたい。
- ・ 身近なことから国際協力を行いたいと思った。
- ・ 積極的にボランティアをしたい。将来、JICA に参加したいと思った。
- ・ 1年生にプレゼンを行い、周りに伝えたい。
- ・ 多くの人に今回学んだことを伝えていきたい。
- ・ コミュニケーション力を身に付けたい。
- ・ もっと世界の物事に関心を向けたい。海外の人とも積極的に話していきたいです。
- ・ 将来、海外で保育士として働くうえで、自分の実力がわかった。
- ・ 開発途上国のイベントがあれば参加したいし、また来年も参加したい。
- ・ 学校で全校生徒の前で3日間の活動を発表して、みんなに国際協力のことを知ってもらいたい。
- ・ 国際協力の難しさや、楽しさを学び、自分もやりたいと思った。
- ・ 目指すものの共有はどこの国でも一緒だと思うから、学校生活でも生かしていきたい。
- ・ もっと外国や日本のことを知りたい。

1 日目（教師用）

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

[アイスブレイキング]

- ・ 生徒たち同士が仲良くなれて良いスタートを切れたと思いました。
- ・ 各校の自己紹介の代わりにグループの中での自己紹介にもう少し時間をかけるとその後ももっと充実した活動ができたのではと思った。
- ・ 自然と周囲の人と声を掛け合える内容で、1つの項目が終わるごとに生徒たちが和らいでいくのが感じられた。
- ・ 相互理解を深めたり、それぞれのコミュニケーション能力を上げるのに良い取り組みだと思った。
- ・ パーソナルスペースは大事だと感じた。
- ・ 一気に視野が世界に広がった気がしました。
- ・ 世界地図に国名と挨拶を置いていく活動も世界のことをもっと知りたいという気持ちにさせたようでした。
- ・ 1日終わってみると、結局全員の名前を聞く機会が無かったので、もう少し早くグループを変えていろんな人と自己紹介し合えると良かったです。

[クバーラ]

- ・ クバーラ自体はとても興味深い内容で、教員も楽しめました。
- ・ 可能であれば、クバーラをする時点から研修員の方々にも参加してもらい、生徒たちと一緒に楽しんでもらいたかった。
- ・ もう少し体を動かす時間があってもよいのではないのでしょうか？
- ・ 全体的に意欲的に活動することができた。
- ・ 初めての競技で、ルールなどは分かりやすかったがやってみるとなかなか難しかった。
- ・ 生徒たちが作戦を練ったりすることで他校の生徒とあっという間に馴染んでいて「スポーツの力」の素晴らしさを感じた。
- ・ ルールを守り、楽しく活動しながら集団生活の規律を学ぶという発想が素敵です。私たちの教育活動もかくあるべきと反省しました。
- ・ 最初は動き方が分からず盛り上がるのに時間がかかったが、やっと面白さが分かったころには時間切れで生徒たちには物足りないようでした。
- ・ スポーツを通してマダガスカルのことを知ることができた。
- ・ すぐ試合が終わり何回もできるので慣れなくても十分楽しめた。

[JICA 研修員との交流]

- ・ 生徒が一生懸命に研修員の方とコミュニケーションをとろうと努めていたのが印象的

だった。

- ・ 未知の国から来た方とお話しできたことが新鮮で楽しかったそうです。
- ・ 研修員の方によっては英語も日本語もまだ話せない方もいらして上手くコミュニケーションをとれていないテーブルもありました。
- ・ 推進員の方から“国際理解教育”“開発教育”についての話があり、改めてこの3日間の意義を確認できてよかった。
- ・ 自分たちから話しかけたり、言っているのを聞き取ったりするのは大変だったが、理解できると嬉しく、とても充実感があったとのことだった。
- ・ コミュニケーションの大切さを感じてくれたのではと思う。
- ・ 世界には色々な人がいて、九州内にも色々なレベルの高校生がいることがわかり、良い刺激となっていました。
- ・ 研修員の方たちも我慢強く生徒たちと関わって下さりありがたかったです。
- ・ Question Box はせっかくなら「必ず2回使う」など指定してもよいのではないかと思います。

[交流夕食会]

- ・ 開発途上国各地の料理を食べることができ、良い経験ができました。
- ・ 量も質も十分だったと思います。
- ・ 時間がかなり短かったので、研修員の方たちとの交流の時間を増やした方がいいと思いました。
- ・ 研修員の方との交流の後なので、続けて同じ方と深く話すのも1つですし、他の国の方のところへ移動しても良いという選択肢があってもいいのかなと思いました。
- ・ アットホームな雰囲気でした。

[その他]

- ・ 協力隊員の方が明るく元気で、よく準備されていて、学校という校内ではできない刺激を色々受けました。
- ・ 時間設定も活動内容もちょうど良かったです。
- ・ これまで漠然と「要なことだ」と感じていた国際理解・国際協力がなぜ重要なのかという点がこの3日間ではっきりと感じられると思う。
- ・ 生徒と同じく様々なことを吸収したい。
- ・ 「JICA 研修員との交流」の時間をもう少し長くすると思う。
- ・ 交通費・宿泊費その他もご負担いただきとても助かりました。部屋も煙草臭さとシャワーカーテンがないことを除けば申し分なかったです。
- ・ 早めにチェックインができるようにしてください。よろしくお願いします。

2 日目（教師用）

[ナマステ体操]

- ・ 汗が止まらず困ってしまった。少々ハードでした。
- ・ 大分、生徒間での交流もできているので不要なのでは？
- ・ 最初は挨拶程度だと思っていましたが、結構動きが複雑で必死にやりました。
- ・ 音楽や動きが民族っぽくてインパクトがありました。
- ・ 一気に国際的なムードになり、その上面白いので、記憶に残るアクティビティでした。
- ・ 朝一番でしたが眠気が消えました。
- ・ すごく楽しかったです。毎年恒例にしても良いくらいだと思います。
- ・ 後半がとても難しかった。ステップの練習があったほうが良かった。
- ・ 異文化の観点で見ると面白い活動でした。学校内でも取り組みそうな内容だった。

[協力隊体験談]

- ・ 「きれいな」内容だけでなく、現実も語っていただけたのはとても貴重でした。
- ・ じっくり聞きたいのと同時に、生徒たちが話す機会が途中あってもいいのかなと思った。
- ・ 学校ではなかなか聞けない話が聞けて、参加した甲斐があったと思います。
- ・ 午後からの活動の参考になりました。
- ・ もっと知りたい！という気持ちになりました。「迷惑な国際協力」が一番大きな学びでした。
- ・ 異文化と接し、そこで何かを変えようとする難しさ、喜びが伝わってきて生徒たちも得るものが大きかったと思います。
- ・ ずっと聞いただけだと疲れますね。とてもいいお話ただただに途中の眠気との戦いが悔しかったです。

[国際理解ワークショップ「援助する前に考えよう」]

- ・ 導入の寸劇が良かった。様々な問題点もわかりやすく演じられていたと思います。
- ・ 本物の協力隊の方々のリアルな仕掛けぶりに引き込まれました。
- ・ 自己満足ではなく、様々な角度から物事を捉える必要性を感じた。
- ・ 「いくら寄付するか」という視点が新鮮でした。
- ・ 自分が今まで個人で国際協力する人に対していかに無関心で中途半端だったかがよくわかりました。
- ・ 本当にその国に住む人のためになるのかを考えなくてはならないことを教える良い、でも導き方が難しいプログラムだと思いました。
- ・ 生徒一人ひとりが真剣に考え、取り組むことができた。

- ・ 全体的に少し話が長かったので、要点をしっかりとめて話をされたほうがいいと思いました。
- ・ とても分かりやすく、時間を作って実践してみたいと思いました。
- ・ 劇のおかげでイメージがより具体的になり、現実的に考えられると思います。

[青年海外協力隊・活動計画作り]

- ・ 私自身もはまってしまい、協力隊員としてどういうことを考慮して活動計画を立てるか楽しく考え、皆さんと意見を出し合い、吟味するという過程も大変勉強になりました。
- ・ チームワークを強めることができ、やりがいを感じました。
- ・ 楽しみながらバリボ村の事を学ぶことができました。
- ・ 話しの時間が少し長かった気がします。生徒たちに考えさせる時間をもう少し与えてもいいのでは？
- ・ 高校生がてきぱきと、しかも見た目にもインパクトのあるまとめを作っていたので感心しました。
- ・ しっかり考える要素を上手に与えればちゃんと考えて表現できるのだと、このプログラムのすごさを実感しました。
- ・ 私たちが気づけなかった世界の問題とその複雑さがどんどん見えてきて、結論を出すのにとても苦労した。
- ・ 途中の「地元の方へのインタビュー」や「協力隊員との質問タイム」などがあり、行き詰ったグループの良い手助けとなっていました。
- ・ 彼らが自分たちで計画を作ったという経験が自信を与えます。

[その他]

- ・ 協力隊体験談の話は面白く、これをメインにしてもいいと思った。
- ・ 色々な仕掛けが本物の力を子供たちに与えてくれています。ありがとうございました。
- ・ 夜も懇親会を開いていただき、先生方とも仲良くなれたと同時に、情報交換もできました。
- ・ 本当に充実した1日でした。
- ・ 時間配分を考えて取り組まれたらいかがでしょうか？遅れていたような気がします。
- ・ 生徒たちの柔軟な発想やクリエイティブなプレゼンが素晴らしく、潜在的な力をもっと引き出す努力をしなければと改めて思いました。

3 日目（教師用）

1. 3 日間を通してこのプログラムの満足度は パーセント

200 パーセント	1 人
100 パーセント	1 人
90 パーセント	2 人
70 パーセント	2 人

理 由：

- ・ 3 日間の内容が段階を追って少しずつ理解を深めながら、体験も伴いながらできるように構成されていて、私自身の理解も深まりました。
- ・ 最後の最後まで考えさせる 3 日間で、生徒の底力を見て驚く 3 日間でもあったため。学校ではわからなかったなあという姿がたくさんあり、嬉しかったです。
- ・ 研修内容は充実しているが、休息時間が少なく、集中力が切れてしまうので、削れる内容は削ってみてはいかがでしょうか？
- ・ ワークショップ・劇でのやり取りを聞き、現地に行った人の話しは説得力があり、生々しく勉強になった。
- ・ クバーラが盛り上がりきらなかった。
- ・ 生徒が成長したという実感を頂ました。
- ・ 生徒の中には総合職採用を目指す子達もいるだろうと思うので、そのような子達に向けてのプログラムもあるととっても意義のある研修になったかと思います。
- ・ 他校の生徒とのグループ活動によりコミュニケーション能力を身に付けることができた。

2. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか？

とても良かった	2 人
良かった	2 人
あまり良くなかった	2 人

理 由：

- ・ プログラム合間の休憩時間が短かったです。
- ・ ワークショップ、活動計画は元気がある 1 日目のほうが良かったかもしれません。
- ・ 研修員の方々との交流の時間がもっと長かった方が良かったです。
- ・ 各プロジェクトごとの話しが長いように思えた。時間がずれていた。
- ・ 研修内容が充実しておりいいと思う。
- ・ 1 日目のクバーラと体験談、研修員との交流で一気に外国が感じられたところに、2 日目のプログラムがきて、ひとくちに海外といっても、必要とするものは地域ごとに違い、自分なら何をできるかと深められた。

3. 来年度の高校生国際協力実体験プログラムに向けて、改善点をご記入ください。

- ・ 協力隊員の方の講話をグループ内で整理する時間があってもいいのかなと思いました。
- ・ 2人同じようなトーンで話が続けると集中力がいまひとつかもしれません。
- ・ 1日目のJICA研修員との交流を充実させてもいいのではと思う。
- ・ 「コミュニティ開発」と最初に限定され、やることがよくわかりませんでした。結局「栄養指導」「衛生指導」「農業指導」等、専門性の必要な支援を考えていたので、しぼりがありすぎると難しいなあと思いました。
- ・ 内容（プログラム）が少し多いような気がします。
- ・ 図書館等で調べたり、情報が得られるともっとよく学習することができた。
- ・ 所長がおっしゃっていた、日本の国益としての開発援助についても、もう少し深い視点をご提供いただければより実りのある学習になったと思います。
- ・ 協力隊員も含め、JICA全体でのキャリアパスについてもご説明いただければ、進路指導としても有益な活動になると思います。

4. 今後、事後学習として取り組みたいこと、生徒たちと進めていきたいことをご記入ください。

- ・ JICAのみならず日本一国として開発途上国に対してどのような支援ができるのかについて共に考えたいと思います。
- ・ 報告会で今回学習したことを発表させ、外国について興味を持たせ、来年も参加させていただきたいと思います。
- ・ 今後は文化祭、県の文化祭などで発表をする予定です。
- ・ このプログラムを振り返り、4人でプレゼンテーションを作り、クラスの下級生の前で発表する。
- ・ 学生集会などで報告会をし、他の生徒とシェアする。

5. JICAの開発教育支援にどのような役割を期待しますか。

- ・ 日本が今後、生き残りをかけて世界で戦っていくために、個人は何ができるのかを知り、考える機会を提供していただきたいです。
- ・ 現場でできる授業案や活動の紹介+実際の研修会
- ・ 興味を持って見ないと見えないところに深い現実があって、そこに実は自分のやりたいことがあるのかもしれないと中高生に伝えるためのプログラム
- ・ 開発教育については似たような授業があり、そういったものと連携してもいいのでは。
- ・ 世界中の人々の平和

2013年度 第2回目 JICA 国際協力実体験プログラムアンケート

1日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあ満足している	不満がある
アイスブレイキング	17人	8人		
クバーラ	17人	8人		
JICA 研修員との交流	15人	9人	1人	
交流夕食会	17人	7人	1人	

●自分の満足度が高かったプログラムについてのご意見、ご感想、予想外だったことなど記入ください。

[アイスブレイキング]

- ・ 初対面の人ばかりで緊張していたが、色々な交流の中でグループの人たちと仲良くなれたことが楽しかった。
- ・ コミュニケーションは大切なものだと感じた。
- ・ 緊張を解きほぐすことができた。アイスブレイキングがなければ友達をつくることができなかった。
- ・ スタッフのユーモアある進行でとてもリラックスできた。

[クバーラ]

- ・ 初めての遊びで、普通の鬼ごっこより楽しかった。
- ・ 運動神経や年齢等、関係なく楽しむことができると思った。
- ・ 色々考えたり、作戦を立てたりと頭を使うことが多くて大変だった。
- ・ マダガスカルについて身近に感じる事ができた。
- ・ 気軽にできるので、学校でもまたやりたいと思う。

[JICA 研修員との交流]

- ・ 英語での会話をスムーズに行うことができずに、もどかしさがとてもあった。
- ・ ジェスチャーを交えて会話を行うことができて嬉しかった。
- ・ 少しでも相手の事、日本との違いを知ることがこんなに充実感のあるものとは知らなかった。
- ・ チーム内でも役割分担を行い、協力し自然と打ち解けられた。
- ・ 世界に目を向けることができた。
- ・ 日本とは違う環境の国々の方と交流して、自分の知らなかったことをたくさん知ることができた。
- ・ 今回の交流で英語を話すことができて、英語が好きになった。

- ・ 将来、仕事で海外に行ったときのために今の会話力をもっとあげていきたいと思った。
- ・ 学校や日常生活では体験できない貴重な経験をすることができた。

[交流夕食会]

- ・ 中国の方と一緒に食事をしたことで、中国への印象が変わった。
- ・ 普段、他の国の料理を食べる機会があまりないため、世界の料理について何も知らなかった。
- ・ 初めて食べる料理もあったが、どの料理もととてもおいしかった。
- ・ 他校の人や研修員の方と話しながら食べることができ、楽しい時間を過ごすことができた。
- ・ 食事中に英語が飛び交う場も初めてで本当に楽しかった。
- ・ 質問されても英語を理解することができず、最初は戸惑いを隠せなかったが、研修員の方がとても丁寧に説明してくれたり、ジェスチャーをしてくれ、徐々にコミュニケーションをとることに苦を感じなくなった。
- ・ もっと話しておけばよかったと思う。
- ・ 外交問題や日中間で起こっている様々な話題に対して日ごろの疑問を解消するいい機会になった。これを機にさらに自分の知識を深めたいと思った。
- ・ 自分の英語力のなさを実感した。

●本日のプログラムの中で、気づいた点や期待はずれだったことがあれば記入してください。

- ・ 全プログラム、予想以上のものができた。
- ・ クバーラがもっと上手にできたらよかった。
- ・ 他の人に助けられる面、見習う面が多くあった。しかし、助けられるだけじゃなくて、自分からもっと勇気を出すようになりたい。
- ・ 自分に足りないものを他の生徒さんから見習えるよう意識したい。
- ・ どんな人でも話しをしてみないとわからないことばかりだと思った。第一印象だけで判断せず話すことは大切だと思った。
- ・ もっとクバーラをやりたかった。
- ・ 人はスポーツや遊びを通して、言語は違っても仲良くなることはできると感じた。
- ・ 会議室には常に民族音楽のようなものが流れていて、リラックスできたし気分が上がった。
- ・ 廊下にはたくさんの心惹かれる写真や、ロビーには外国の方がたくさんいて、日本なのに海外にいるような気分になってよかった。
- ・ JICA 研修員との交流や夕食会は、もっと研修員と話せる時間がほしかった。また、グループ以外の研修員と話せる機会もほしかった。
- ・ 英語がわからなくて、うまく聞き取ることができなかったし、話しを広げることができなかった。
- ・ JICA 研修員との交流で自分がどれだけ普段勉強していなかったかわかった。

- ・ 異国の話を聞くことはとても新鮮で楽しかった。
- ・ 英語だけでなく、違う国の言葉を知れてよかった。
- ・ 交流夕食会の時間がもう少しほしかった。
- ・ 自分から積極的に話していくことが必要だと思った。
- ・ 東南アジアの話しも聞きたいと思った。

2 日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあ満足している	不満がある
ナマステ体操	12 人	14 人		
協力隊体験談	17 人	9 人	1 人	
国際理解ワークショップ	16 人	7 人	1 人	
青年海外協力隊・活動計画作り	17 人	7 人	1 人	

●自分の満足度が高かったプログラムについてのご意見、ご感想、予想外だったことなど記入ください。

[ナマステ体操]

- ・ ラジオ体操よりきつくてびっくりした。
- ・ ポーズも難しくて真似をするのが大変だった。
- ・ ちょっと恥ずかしかったけれど、気持ちよく体操できた。

[協力隊体験談]

- ・ 日本ではありえないことをたくさん聞く事ができた。
- ・ タンザニアの話しではいろいろとショックを受けた。
- ・ 現地に行った人の話を直接聞く事ができてよかった。
- ・ どういう思いで、どういう目的で行ったのか、行って驚いたこと等、国々で考えることや価値観もまったく違うと感じた。
- ・ 自分も実際に見に行ってみたいと思った。現地の状況を自分の目で見たいです。
- ・ 海外青年協力隊がどんな活動をしているのか知ることができてよかった。
- ・ 現地の人にも本当に喜んでもらえることを考えたい。

[国際理解ワークショップ「援助する前に考えよう」]

- ・ バリボ村の紹介から、村人まで楽しかった。いろいろな人が村のいろいろな役になり、セリフ等もあって面白かった。
- ・ その国の伝統や雰囲気まで出ていて、生活まで見る事ができたことがよかった。
- ・ 自分が正しいと思った意見も、違う視点から見ると十分な意見ではなく、他の人の意

見も自分と正反対だったりしてとてもいい機会だった。

- ・ どのようにしたらもっとよくなるか考えると、たくさん改善する点が出てきたので、何事もよく考えるともっと上手くいくのかなと思った。

[青年海外協力隊・活動計画作り]

- ・ 青年海外協力隊の難しさについて考えることができた。
- ・ 村人に質問することで、自分の考えの甘さや自分の考えが具体的でなく、現実性もなかったと反省した。
- ・ とても難しかった。
- ・ 班のみんなの意見をまとめていくことは大変だったが、JICA のスタッフのサポートによってまとめることができた。
- ・ 実際に自分が現地に行ったときに生かせればいいとおもった。
- ・ すごくよい経験になった。
- ・ 出会って2日目の人とこんなに親密に話せたのは初めてで、2度とないと思うので、本当に楽しい思い出になった。
- ・ 頭の中では簡単に思いつくのに、実際にするとなったらとても難しいことと知り困った。
- ・ 様々な問題が山積みで、その中でも限られた時間・お金でプロジェクトを立てるのは本当に難しかった。
- ・ 今までの中で1 番国際協力について考えることができたと思う。
- ・ 自分の考えをしっかりと人に伝えることができるように、より深くまで考えたい。
- ・ チームの協力でとてもまとまり、最後まで完成することができてよかった。
- ・ いろいろな人の話を聞けば聞くほどわからなくなり、奥が深く、問題に問題が重なり、解決方法はひとつもないように思えた。
- ・ 少しずつ、無理がないように、時間をかけてでもいいので、行動し、やってみることが大切だと思った。
- ・ グループの仲間と協力しながら、村をどうやって変えていくかを話し合うとき、助け合いのよさ、協調性の大切さを改めて考えた。
- ・ 自分の考えを主張しながら相手の話を受け入れることは、これからとても重要になってくるし難しいことだと思う。
- ・ 日ごろから心がけていくことが大切になると考える。
- ・ 学校の授業より頭を使い、なかなかない経験をすることができた。
- ・ 決められたこと、ある程度基盤があるものをやる側は、計画を一から立てる側に比べると楽だと思った。

●本日のプログラムの中で、気づいた点や期待はずれだったことがあれば記入してください。

- ・ ナマステ体操が面白かった。
- ・ 協力隊体験談は時間が過ぎるのが短く感じた。
- ・ 体験前後は違う考え方、見方をしているし、日本の社会生活においても意識すべきこ

とがたくさんあって、この早い時期に知れてよかった。

- ・ ナマステ体操は速いし、難しくてついていけなかった。
- ・ 協力隊体験談を聞いて「本当の幸せとは何か」と考えた。何不自由なく生活している私たちにとっては、「ありえない」の連続だった。
- ・ 現場を実際に見て感じ取って、現地の人々の声を聞くことが1番大切ではないかと思った。
- ・ 劇がとても面白かった。
- ・ 実際にやってみると、やりたいことが簡単にできないということがわかった。
- ・ 本当に人を変えるというのは大きな仕事で、あきらめずに根気強く、がんばることが大事だと思った。
- ・ 青年海外協力隊はとても大変なことだと思った。それをやってきた皆さんは本当にすごいと思う。
- ・ 英語圏以外の国では、現地語も学ばなければならないので、語学に興味を持つことは大切だと思った。
- ・ 1番大切だと思うことは、派遣された国を愛することだと思った。
- ・ 1つのことを解決しようとするときに、違うことや他のことにまでつながって解決できなかった。
- ・ 活動計画作りで、自分たちで職種を選べたらよかった。
- ・ もっとまとめる時間や、JICA 職員に話を聞く時間があってほしかった。

3日目（生徒用）

●満足度

	とても満足している	満足している	まあ満足している	不満がある
活動計画発表	18人	6人		

3日間を通して、このプログラム全体の満足度は_____パーセント（％）

満足度	120%	100%	90%	70%
	5人	8人	10人	1人

●満足度の理由

- ・ 周りの班に遅れをとってしまったけれど、班のみんなで遅くまで頑張れたから。
- ・ まだ知らないこともたくさんあるけど、自分の知らなかったことをたくさん学べたし、国際協力により興味を持つことができた。
- ・ 今までに経験したことがない体験をした3日間だった。
- ・ 世界の状況についてもよくわかったが、自分の気持ちや考え方が変わったことが1番よかった。

- ・ 青年海外協力隊の実体験の話を聞くことができ、実際に活動内容を考えて、難しかったけれどとても充実していた。
- ・ 自分の国際協力に対しての知識・理解の甘さをよく知ることができて、とても充実した3日間だった。
- ・ 今回の活動は、これから海外を見ていくうえで、一番の糧になると思う。
- ・ 一回も話すことができなかった人がいたのが残念だった。
- ・ 改めて、自分たちは恵まれているということを実感することができるいい時間だった。
- ・ みんなで苦勞して考えた活動計画がちゃんと発表できて、またみんなに自分の思いを伝えることができた。
- ・ とても学ぶことが多くて、ひとつひとつの活動で頭を使って、疲れたけれど楽しかった。
- ・ 初対面にもかかわらず、みんなで仲良く楽しく計画できたことは本当にうれしかった。
- ・ 他のグループの案を聞くことができて、たくさん気づくことができた。とても勉強になった。
- ・ もう少し現地の方々と交流したかった。
- ・ 楽しかったし、何より思い悩んでみんなで答えを出していくことに充実を感じた。
- ・ 日本だけでなく、世界に目を向け、仲間と協力して物事を考えていくことの大切さを学べた。
- ・ 交流会で話している内容が英語でわからなくて残念だった。

●一番印象に残ったプログラムは何ですか。その理由を記入してください。

[アイスブレイキング]

- ・ やはり、最初の自己紹介は緊張したから。
- ・ 全員まったく知らない中で、きちんと話すことができた。

[クバーラ]

- ・ チーム戦でチームワークが作れてよかった。
- ・ 帰ってからもこういう遊びがあることを伝えたい。
- ・ 本当に面白かった。

[交流夕食会]

- ・ 外国の方とあんなにゆっくり食事を共にしながら話ができただけが初めてで、すごくうれしかった。
- ・ これから将来に向けて、英語力をつけていきたいと思った。

[青年海外協力隊・活動計画作り]

- ・ 3日間で学んだことを生かし、自分たちでどのようなことに目をつけ、どのように改善していくかを話し合い、まとめるということが1番印象に残っている。
- ・ 今自分が知っていることを発表できてよかった。

- ・ 自分の説明力のなさに改めて気づかされて少しショックだった。しかし、自分の足りないところが知れてよかった。
- ・ グループの仲間と協力し合いながら作品を完成させていくことが楽しかった。
- ・ 発表することは苦手だったが、緊張しながらもやりきったときは少し成長できたと感じることができた。
- ・ 出会って2日目の友達とあそこまで話し合えた機会に感謝している。
- ・ 軽く、浅い考えでは解決できず、日本では可能なことも現地では難しいことがわかった。
- ・ 今回は模擬だけだったが、実際に海外に行った協力隊の方々は本当にすごいと思った。
- ・ たくさんの視点から、一緒に考えることができ、悩んでいる時間が1番楽しかった。
- ・ 意見の出し合いも、まとめることも、発表することも自己主張と協力があつたからだ実感できた。
- ・ すごく疲れたけれど、1番青年海外協力隊の方の仕事を体験できたと感じた。
- ・ 先輩に自分の意見を言うことは緊張するけれど、それはこれからも大切なことだと思うので、しっかり自分の意見を持って生活していきたい。
- ・ 発表をして、村人からの厳しい質問に答えられず大変だったが、自分が実際にその国に行ったような充実感を感じることができた。
- ・ 国際協力に対して、自分の考えが増えた。
- ・ 自分たちにできる支援の形を考えていくことが難しく、村人のために活動することにやりがいを感じた。
- ・ 協力隊の活動の一端に触れることで、国際協力への理解を深めることができた。
- ・ 自分たちにできることは何か考えさせられた。
- ・ まだまだ足りないところはあるが、一生懸命やれてよかった。
- ・ 最初は簡単なものだと思ったが、考えるほどキリがないくらい問題が出てきて本当に大変だった。
- ・ 価値観があまりにも違いすぎて、上手く伝わらなくて、グループ内で何度も話し合い悩んだ。でも、それが国際協力ではないかと考えた。

[DVD 鑑賞]

- ・ 国と国との価値観の違い、日本のような争いのない国ばかりではなく、そういう国もあるということを理解することが大切だと感じた。

●プログラム全体を通しての感想

- ・ アイスブレイクやクバーラ等、みんなで楽しむことができてよかった。
- ・ 実際の体験談を聞くことができて、現状を知ることができてよかった。
- ・ どのプログラムも最高だった。
- ・ 自分が思っていたよりも本当に楽しくて、心に響いたり、自慢にもなるいい経験ができた。
- ・ 協力することの大切さを改めて知ることができてよかった。

- ・ もっと世界に目を向けてこれから生活していくべきと感じた。
- ・ スタッフの方々の進行が本当によかった。
- ・ 全体的にはもう少し外国の方の直接の話を聞きたかった。
- ・ 全プログラムわくわくしながら取り組むことができた。
- ・ 知らないものばかりだったが、それを学ぶことができて、すこしでも青年海外協力隊に近づくことができた気がする。
- ・ 周りには意識していない問題がたくさんあって、深く考えていくと気づいたり、知識を得たからこそ気づくことができると思ったし、一生懸命にやれば何かがあると思った。
- ・ 「国際協力」について深く学び、実際に体験できて、自分を成長させることができた。
- ・ 頭だけでなく体を使って、国際協力することも大切だと思い、今後は様々な視点から国際協力を考えていきたい。
- ・ いつも自分が当たり前だと思っていたことは外国では当たり前ではなくて、価値観もぜんぜん違うと感じた。しかし、この違いを認めることが本当に大切なことだということがわかった。
- ・ 色んな視点から考え、自分なりに考えをまとめることができるようになった。
- ・ 国際協力は楽しいことばかりでなく、難しい事だらけで、辛さがわかってよかった。
- ・ これからも人との出会いを大切にしたい。

●このプログラムを通して学んだことを、これからどのように活かそうと思いますか。学校で取り組みたいこと・やってみたい事などありますか。

- ・ もっといろいろな人と国際協力に取り組み、色んな問題にぶつかりたい。
- ・ 自分の将来の夢が少しずつ明確になってきたので、これを生かしていきたいと思う。
- ・ 周りにいる家族、友達に伝えたい。
- ・ この3日間で学んだことを忘れずに、まずは身近な問題から考えていきたい。
- ・ 開発途上国の抱えている問題から目をそらさずにしていきたい。
- ・ 国際協力の難しさを学んだからこそ、これからより開発途上国に対しての思いが強まった。
- ・ 価値観の違い等をきちんと認めていきたいと思う。
- ・ 様々なことに興味を持つ一歩として、新聞を読み、日本や世界の状況を把握しておきたい。
- ・ 自分のやるべきことに対する姿勢をもっと見直し、自分がものに持つ思いを見直して、することを具体的に思案するようにする。
- ・ みんなとワークショップをしてみたいし、意見をディベートしたい。
- ・ 世界のことを知れば知るほど奥が深く、他人事では済ますことができないと思った。
- ・ 自分がやれることを考えていきたい。
- ・ 協力しながらことを進めていくことの大切さを大事にしていきたい。
- ・ 3日間で学んだことを、周りの人たちに伝えて、現在の状況を知ってもらいたい。
- ・ クバーラやナマステ体操などを、学校行事を通じてどんどん広めていきたい。

1 日目（教師用）

1. 各プログラムの感想・意見・改善点などをご自由にご記入ください。

[アイスブレイキング]

- ・ 初めての研修で、各学校の生徒と仲良くできるか不安だったが、時間の経過と共に打ち解けているようだったので安心した。
- ・ 和気あいあいできていた。
- ・ 自己紹介の声が小さく、何を言っているのかわからない生徒がいた。
- ・ 地図と挨拶のカードは、交流にもつながる良い活動だと思う。
- ・ 同じ高校生同士で、意識も高く、良い導入の方法だと思う。
- ・ 最初は緊張してぎこちない様子だったが、多くの活動を行ううちに生徒たちの笑顔が増え、会話も弾み、楽しく活動できていた。
- ・ このアイスブレイキングの方法は、学校でも使いたいと思った。
- ・ 学校紹介はポスターとスピーチの両方があってよかった。
- ・ 一分間という制限は、生徒も時間を意識してスピーディに紹介でき良かった。
- ・ 誕生日、アルファベットでのペア探し、グループメンバー探しは、ただ単に発表するより、ゲーム性があり、子供たちも楽しんでいた。
- ・ ペア、グループでの自己紹介も内容が明確であり、またオーバーリアクションをさせる点など大変効果的だった。
- ・ ごく自然な理由付けで作業やゲームが進められていてすばらしかった。

[クバーラ]

- ・ 日ごろの運動不足が身にしみた。
- ・ 米村さんの一本操のお兄さんの工夫もあり、とても楽しそうに生徒たちが参加していた。
- ・ ルール説明の際、確認の返事がなかった場合は、反応があるまで癖を付けてもらおうといいと思う。
- ・ 教員チームの参加は2回ほどでいいのではないかな。
- ・ 体育館の室温が去年より低くてよかった。
- ・ 小学生はもちろん、高校生も楽しめるよいスポーツだと思う。
- ・ 他のグループと合同でのチーム編成だったため、より多くの参加者と打ち解けるきっかけになった。
- ・ 簡単なルールで誰でも楽しめるものでよかった。
- ・ ゲームのあとに、マダガスカルの話も聞けてよかった。写真が少し見えにくかったため、電子黒板でされてもいいと思った。
- ・ スリランカの体験についても参考になった。

- ・ 昔ながらの遊びをルール化し普及させるまでの活動は、今後の国際協力について考えるうえでの示唆となりました。
- ・ 時間配分は長すぎず短く感じる程度で丁度よかった。
- ・ 道具も要らず、運動能力もさほど影響せず、チームワークも求められ、とても良いスポーツだと思う。
- ・ 日本の小学校でも広がったらと期待する。
- ・ 学校に戻ってもまた試してみたい。
- ・ ルールの説明とその徹底がすばらしかった。

[JICA 研修員との交流]

- ・ 九州各県の引率教員と情報交換できたのがよかった。
- ・ 楽しそうにできていたのでよかった。
- ・ 数日前にでも、研修員の方の国籍がわかっていたら、高校生なりに質問を準備できてより充実すると思う。
- ・ 海外から学びに来る人たちの気持ちを知るきっかけになる。
- ・ なかなか自分のいいたいことが伝えられず、悔しかったと生徒が言っていた。そのような気持ちを持つことで、外国語を学びたいという意欲につながり、大切さにも気づいたのではないかと思う。
- ・ 研修員の方にも積極的に話す人とそうでないひともいた。それも良い経験だと思う。
- ・ 英語を母国語としない研修員との交流は、英語の大切さ、英語が全てではないということを生徒に気づかせることができよかった。
- ・ 写真や資料、自己紹介の内容の指示等、コミュニケーションをサポートする対策もあり、参考になった。
- ・ 別会場で日本人教員向けの研修があり、生徒は教師に頼らず、また教師もお互いを知る機会となりよかった。
- ・ JICA の役割が良くわかり、有意義だった。

[交流夕食会]

- ・ 様々な国の料理を食べることができて非常に良かった
- ・ 味付けも日本人にあうようにやさしかった。
- ・ 食べ盛りの子供にとって量が少なめだったかも。
- ・ メニュー等工夫されていて、ハラルの説明もあり勉強になったと思う。
- ・ 中国の研修員がエビチリは日本と中華の MIX だと言っていた。
- ・ 楽しくいただいた。
- ・ 時間が足りないと感じた。
- ・ 研修員の母国の料理が楽しめ、また彼らに紹介して頂くことで交流の話題にすることができた。
- ・ 事前に研修員の方々の国々に関する予備的な講座を開いておけば、生徒たちはもっと

多くの疑問や関心を持てるようになると思う。

[その他]

- ・ 来年は若い先生に引率で着てもらうといいと思った。
- ・ 一つ一つの活動が大変入念に計画されており、とてもよかった。
- ・ 担任クラスや授業において、様々なワークショップ、特に自己紹介やアイスブレイキングをさせる場があるが、大変参考になった。
- ・ 宿泊等にスリッパがほしい。
- ・ スタッフの方々一人ひとりが目的意識をしっかりと持っていて素晴らしいと思った。

2日目（教師用）

[ナマステ体操]

- ・ 恥ずかしがらず、静から動へと楽しめた。
- ・ 映像を見ながら、日本のラジオ体操のように普及させたい。
- ・ 初めて体験した。
- ・ 振りがタイらしく、次の動作が予測できず大変楽しめた。
- ・ 十分な目覚まし体操であり、笑えました。
- ・ ラジオ体操より活動的で、途中で汗が出た。
- ・ 青年海外協力隊の方が普及されていると聞き、驚いた。
- ・ とてもユニークな体操で刺激的だった。
- ・ とても生徒の興味を引く映像だった。
- ・ 体操をしたことで子供たちの緊張もほぐれ、次の活動にスムーズに入っていた。

[協力隊体験談]

- ・ 職種の違う2人の体験談が聞けてよかった。
- ・ 時間も長すぎず、集中力の持つ程度でよかった。
- ・ エイズと差別、バレーボール指導と実体験に基づいた生の声はとても収穫があった。
- ・ 知らない世界を感じることができた。
- ・ 日本と異なる文化、生活風習の土地で活動された方の話は、日本での生活でも同じことだと思った。
- ・ 環境が変わり、考え方が変わり、困難さを感じる場面も多くなったときに、いかにモチベーションを下げずに行動できるかが重要だと感じた。
- ・ 大変有意義な話を聞く事ができた。
- ・ パワーポイントを使っただけの発表だったのでわかりやすかった。
- ・ 青年協力隊の職種についてよく理解できた。

- ・ 生徒からの質問が少なかったので、いったんグループで1つ質問や意見を考えさせたらいいと思った。
- ・ なぜ活動に参加しようと思ったのか、その動機とそのためになにを行ったのかなどの話を聞く事ができてよかった。
- ・ 話をうかがった後、グループごとに話し合いをさせてもいいと思った。

[国際理解ワークショップ]

- ・ \$10 の寄付はお金の役割、信頼を考えさせ、改善の提案まで深く考える機会となった。
- ・ 時々、指示があいまいだったように感じた。
- ・ 設定時間は難しいかも知れないが、一つ一つの作業を細かく区切っても良かったかもしれない。
- ・ 生徒たちは、普段考えてそれを文章にして表現する機会が少ないことに気づかされたと思う。
- ・ 多様な意見があり、価値観の違いについても知ることができたと思う。
- ・ さりげない話しの導入から、様々な解釈を導き出す手法はとてもすばらしいと思います。
- ・ アイ子の活動について賛成か反対かという聞き方では、アイ子の行動自体は慈悲的であるので、答えにくかったと思う。
- ・ 自ら行動することは悪いことではないので、その中の問題点を見つけ、改善策を考える法がいいのではないか。
- ・ グループ内で発表者を順番に回すなどしたほうがよかった。
- ・ 細かく段階を踏んで活動が進んだので、生徒たちも少しずつ自分の考えを整理しながら進めることができたと思う。

[青年海外協力隊・活動計画作り]

- ・ 難しい問題に幅を広げず、深く考えていくことが大切だと考える。
- ・ 想像して、予測される課題をどう考えるか、何を想像するか「村人」との情報交換も大切だと感じた。
- ・ 他のグループの広幅用紙を見て回らせる時間は良かったと思う。その後、問題点を選ぶ段階で、最重要課題を4つ選ぶのか、自分たちができることの中から4つ選ぶのか生徒はとまどったと思う。
- ・ 寸劇は、生徒を巻き込んでいった点はただ見るよりわかりやすく、また楽しめてよかった。
- ・ 村人に質問にいった点は良かった。
- ・ 生徒たちが実際に行動するという形式は珍しいものだった。
- ・ JICA の方々の準備が大変だったと思うが、コミュニケーション能力の大切さを実感できる体験だった。
- ・ 「正解は無い」活動だからとはいえ、計画を立てるのは大変だったが、いい経験となった。

- ・ 適宜与えられるヒントが役に立ったが、ダイヤモンドランキングで少し戸惑った。
- ・ 実際の活動計画作りでは、ステップ1～3をなかなかうまくつなげることができず、苦戦していた。
- ・ 事業学習の際に、ウェービング(マッピング)をしていただいたので、それをどこかにつなげたいと思った。
- ・ 午前中の話題を題材に、明日の全体発表につながる作業に移行していった。突っ込みどころがありすぎて、多少なりとも不安を残したまま終了した。

[その他]

- ・ 生徒にとって、これほど頭を悩ませ、まとめるのに苦労した経験は学校現場ではなかった。
- ・ 貴重な体験になった。
- ・ 寸劇がとても楽しかった。
- ・ 初日から JICA の皆さんのパワフル全快な姿に圧倒されっぱなしでした。

3 日目（教師用）

1. 3 日間を通してこのプログラムの満足度は パーセント

1000 パーセント	1 人
100 パーセント	4 人
99 パーセント	1 人
95 パーセント	1 人

理 由：

- ・ 視野を広げ変われるチャンスになったと思う。
- ・ カリキュラムがよくできていて、細かな配慮を感じた。
- ・ 高校生が何かを感じ、次の行動へとつながらせる手伝いを教員ができたと思う。
- ・ 普段の授業ではあまり体験することができないような「答えのない問題」に取り組むことができてよかった。
- ・ 体験談を直接聞く事ができたのはとても貴重な体験だった。
- ・ それぞれのスタッフの方のお話を聞く機会があってよかった。
- ・ 「国際協力」ということをしっかりと考えることができ、大変よかった。
- ・ アイスブレイク、ワークショップ等実践的な内容で能動的に生徒も行動していた。
- ・ 日常の授業で考えてそれを伝えるという場面があまりないので貴重な体験になったと思う。
- ・ もう少し日程を長くしてもいいのではないか。
- ・ とてもすばらしいプログラムだった。

- ・ スタッフのチームワークのよさ、事前の準備、指示の出し方、全てに感動している。
- ・ 発表能力はもちろんのこと、アイデアを出してまとめる力も身についたように思う。
- ・ 他校の生徒とも仲良くなることができ、コミュニケーション能力も向上した。
- ・ 国際協力についてだけでなく、生徒はじっくりと時間をかけて自分たちができることについて考えることができていた。
- ・ 完璧な答えではないとしても、グループで知恵を出し合い、議論し、考えをまとめ発表し、相手を説得するという普段学校生活でできない経験をさせることができた。

2. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか？

とても良かった	4人
良かった	3人
あまり良くなかった	
良くなかった	

理由：

- ・ 盛りだくさんの中で、バランスよく伝わった。
- ・ それぞれの活動が次の活動につながるように考えられていてとてもよかった。
- ・ 休憩が10分あると、生徒たちの気持ちもリフレッシュできるのではないかと思います。
- ・ 無理なく毎回、興味関心を持たせ、生徒にあきさせないところがいい。
- ・ クバーラ前後の着替えの時間がもうすこしほしかった。
- ・ 眠くなりがちな午後に劇をもってきたのはよかった。
- ・ 熱中症対策にも気を配っていただき、生徒は健康に過ごすことができた。

3. 来年度の高校生国際協力実体験プログラムに向けて、改善点をご記入ください。

- ・ 外来語には日本語表記を添えてほしい。
- ・ 内容が充実していて、とてもよいプログラムだった。
- ・ プロジェクト作成までの一連の流れがスムーズだった。
- ・ 最初緊張していた生徒たちが、次第に打ち解けていく姿は感動的だった。
- ・ 来年も同じようなプログラムをいてほしい。
- ・ 国際協力実体験プログラムの全国大会等があれば、それぞれの各県でさらに国際理解、国際情勢を知るきっかけとなり、たとえば高校生平和大使のような目に見える形で、世間に知らせることが可能なのではと思った。
- ・ 最終日のプレゼンのトピックが似通っていた一因として、2日目のダイヤモンドランキングがあると思う。トピックはある程度自由に選ばせたほうがいいと思う。
- ・ ラストのNINJA & SOLDIERがよかった。
- ・ モチベーションが低い生徒がいたのが残念だった。
- ・ 休憩時間をもうすこし長めに取ってほしい。
- ・ 1日の開始時間、終了時間など無理がなく、時間配分も適切で、内容にも満足している。

4. 今後、事後学習として取り組みたいこと、生徒たちと進めていきたいことをご記入ください。

- ・ 参加した生徒には、部活を通じ国際協力や支援についてできることを探し、また、ビデオや関連施設への訪問を通して学習を続けていきたい。
- ・ 校内での学校行事や授業を通して国際理解教育を今後も続けていきたい。
- ・ 文化祭オープニングで研修発表をさせ、それが全校生徒に波及することを期待する。
- ・ 授業の中で国際情勢について考える時間を作れるよう努力する。
- ・ 大学進学の間接等で生かしてもらいたい。
- ・ 生徒ばかりでなく自分自身でも学習を続けたい。
- ・ クバーラやナマステ体操を普及させる
- ・ プログラムに参加しているときには見えなかった部分や十分に考えることができなかった部分を改めて考え、生徒たちなりに考えたこと感じたことを伝えてもらい、他の生徒の考えるきっかけにしたい。

5. JICA の開発教育支援にどのような役割を期待しますか。

- ・ 今後も開発途上国の教育支援に尽力していただきたいと同時に、日本国内や学校への広報・宣伝にも力をそそぎ、より多くの人に JICA の存在意義を伝えてほしい。
- ・ この事業の継続と、多くの生徒に伝わる仕組み。
- ・ 学校では十分に伝えることができない部分を伝えてほしい。
- ・ 生徒の視野を広げ、世界に目を向けることができるような体験の機会や実際に支援に携わっている方の話を聞かせたい。
- ・ 出前授業や講演を通して国際理解について啓発普及してほしい。
- ・ 大学レベルの実体験プログラムも実施してほしい。

